

# 第1部 都市近郊農村のよりよい生活環境を目指して —兵庫県加古川市西部地域において水と緑のウォーキング回廊の可能性を探る—

神戸学院大学人文学部人文学科地域社会領域

矢嶋 巖

神戸学院大学人文学部人文学科地域社会領域

2017年度地域社会専攻演習Ⅲ（矢嶋ゼミ）履修生

## I はじめに

矢嶋 巖

本報告は、神戸学院大学地域研究センターの明石グループにおける研究課題である「都市郊外地域における環境・社会が有する価値についての研究」の一環として行なわれた、2017年度地域社会専攻演習Ⅱ・Ⅲ履修学生である、地域社会領域矢嶋ゼミ3回生17名による研究結果をまとめたものである。

神戸学院大学地域研究センター明石グループ都市郊外班では、都市化村落などの都市郊外地域における残存する種々の環境的・社会的要素とその価値を評価し、地域住民の生活においてその価値が再発見、再評価されることをめざし、地域住民との協働を図りながら、兵庫県加古川市西神吉町を中心とする加古川西部地域において研究を続けてきた。

本研究は、対象地域において、地域持続のための糧となる魅力を見つけて活動をしている人たちや、魅力とまでは位置づけずに活動している人たちに対して、学生が聞き取り調査を行ない、それらの活動の意味とさらなる可能性について考えようとしてきた。

2017年度は、加古川西部地域に分布する溜池や里山をつなぐウォーキングルート、水と緑のウォーキング回廊（仮称）の構想を念頭に置き、ルートのさまざまな魅力を、地域が有する潜在的価値として位置づけて調査し再発見し、その結果を、地域の魅力が詰まったウォーキングルートガイドとして示すことを目指した。それにより、地域の住民自身が、地域の魅力に気づき、地域の価値として再発見することを目的とした。

本研究課題による夏季研究調査に至るまでの経緯は以下の通りである。2010年度人文学部人文学科人間環境コース矢嶋ゼミ4回生長尾貴人君による卒業研究「カイボリから見たため池と地域住民との関わりについて—兵庫県東播磨地方を事例に一」に端を発するもので、地域研究センターの研究としては、2011年9月に実施した人間環境コース2011年度矢嶋ゼミ3回生による加古川市西神吉町鼎四地区を対象とした研究、2012年度人間環境コース矢嶋ゼミ4回生鈴木晨平による卒業研究「都市郊外近郊農村における農業の持続と活性化—兵庫県加古川市西神吉町鼎を中心に—」、2013年9月に実施した人間と社会コース現代

社会領域 2013 年度矢嶋ゼミ 3 回生による加古川市の加古川西部地区における研究、2014 年 9 月に実施した人間と社会コース現代社会領域 2014 年度矢嶋ゼミ 3 回生による加古川市西神吉町鼎富木地区における研究に引き続くものである。

とくに 2014 年度における研究では、西神吉町鼎富木地区において悉皆調査を行ない、同地区を通じて、東播磨地域の都市近郊農村が抱える課題を浮き彫りにすることを試みた。その研究の後である 2015 年度に、いったいどのような研究がなされるべきかについて検討し、富木地区が位置する西神吉町を含む加古川西部地域の都市近郊農村が抱える複数の課題を念頭に置き、それらに一定程度通用する提案を行なうことを目標にすることを考えた。

それを踏まえて、2015 年度は、人口が減少局面に転じた大都市圏周辺域の兵庫県加古川市西神吉町とその周辺地域の都市近郊農村（加古川市東神吉町、同志方町）において、地域持続のための糧となりうる宝物を見いだして活かそうとする取り組みや、今後活かすことが可能と思われる要素を、地域の宝物として位置づけて取り上げ、それらを通じて、都市近郊農村の将来のあり方について考えることとした。その際、祭り、災害（記録）、建築・景観、農産物・野外活動の 5 テーマを設定し、これらについて、新規に取り上げたり、より踏み込んだり、あるいは対象地域をやや広くしたりした調査を行ない、地域持続のための宝物として検討した。

2016 年度は、2015 年度の研究から派生して研究課題を設定し、地域の宝物として、里山とそれにおける野外活動に価値を見いだそうとした。具体的には、加古川市東神吉町神吉の神吉山において行なわれている里山保全活動である、ふれあい里山会神吉の取り組みを取り上げた。地域における神吉山の活動の位置づけをさらに高め、より多くの住民が活動に関心を持つための方策について考えるべく、神吉町内会のコミュニティ、神吉山の生物、歴史、神吉山を活かしたスポーツについてまとめ、それらを活かした広報発信として、マップを作成する提案を試みた。

2017 年度は、富木地区環境保全協議会の富木攻氏からの提案で、繰り返すが、加古川西部地域に分布する溜池や里山をつなぐウォーキングルート、水と緑のウォーキング回廊（仮称）の構想を念頭に置き、ルートのさまざまな魅力を、地域が有する潜在的価値として位置づけて調査し再発見し、その結果を、地域の魅力が詰まったウォーキングルートガイドとして示すことを目指した。それにより、地域の住民自身が、地域の魅力に気づき、地域の価値として再発見することを目的とした。富木氏との調整の結果、ウォーキングルートの対象としたのは、東神吉町天下原地区、加古川ウエルネスパーク、神吉地区、神吉山、西神吉町宮前地区、神吉大池、宮山、富木地区、蓮池、盆の池、加古川市立総合体育館、志方町投松地区畑谷池、志方町志方地区である。ただし、広範囲に及ぶため、志方町志方地区については 2 回生の研究に取り入れることとし、3 回生の研究と別に行なった（第 3 部参照）。

ルートのさまざまな魅力の要素を織り込んだマップを作成するにあたっては、テーマや対象によって異なるマップを作成しその過程を最終的に報告する分野班を設定した。また、実際の調査では、地区別にフィールドワークを行なう必要があることから、地区の実情が分

野班による研究に反映されることを狙って、さまざまな分野班メンバーから構成される現場調査班を設定した。

当初設定した分野班は次の通りである。A ルート班で、ハイキング・ウォーキングと自然環境班で、近年のハイキングブームと社会的ニーズ、ルートにおける自然環境を探る。B kids 班で、小学校教育や親子のレクリエーションとしての魅力を探る。C 町内会班で、ウォーキングルートになることについての町内会の考え、コースの草刈り作業（農業・農村景観維持作業）、町内会連携などを探る。D 農業・ウォーキングルートのセールスポイントとしての歴史と農業・農村景観を探る。E ハイキングのインフラ1班で、交通、スポーツ関連公共施設（ウエルネスパーク、総合体育館との連携）、トイレの分布を探る。F ハイキングのインフラ2班で、飲食店、物販店（ウエルウエル、体育館スナック、ふぁ～みん SHOP、コンビニ、靴下販売店）を探る、とした。

現場調査班は、西から、①富木・総合体育館班、②宮前・宮山班、③神吉N班（含神吉山）、④神吉S班（含ふぁ～みんSHOP、ふれあい里山会）、⑤天下原・ウエルネスパーク班とした。広い神吉地区は、里山を中心とする北部と、神吉地区の集落を中心とする南部に分けた。

本研究では、2度の事前踏査を行なった。1度目は2017年6月11日に実施し、宝殿駅から神姫バスで神吉に至り、神吉町内会ふれあい里山会神吉の里山維持活動を見学した後、神吉山に登って戦没者供養塔、西国三十三ヵ所石仏群を見学して下山した後は、神吉大池を経て、用水路沿いに神吉八幡神社に至り、宮山登山口を確認してから、鼎富木地区の蓮池の周囲を回り、鼎富木地区、鼎西脇地区のカモメ池まで踏査し、西脇バス停から神姫バスで宝殿駅に至り、解散した。

7月16日には、加古川駅から神姫バスで加古川ウエルネスパークに至り、施設を見学した後、天下原地区、神吉地区を踏査してから、ふぁ～みん SHOP かんき店を見学した。その後、那須与一墓を経て、宮前地区内を通り、神吉八幡神社で昼休憩をとった。その後、宮山に登り、北尾根を下山して神吉大池の西縁を下り、宮前地区を経て鼎富木に向かい、盆の池を経て、鼎富木地区の靴下販売店トミキの店舗を見学した後、西脇バス停から神姫バスに乗車して宝殿駅に至り、解散した。

これらのフィールドワーク結果に基づき、ゼミでは、合宿調査で確認すべき項目や、町内会長を対象とする聞き取り調査を予定し、それらにおいて確認する内容について検討し、調査の準備を行なった。

本調査は、2017年9月8～10日にかけて合宿形式で行なった。現場調査班に分かれ、それぞれが事前に準備していた確認リストに基づき、現地の確認を行なった。また、事前に天下原町内会、神吉町内会、宮前町内会、富木町内会の各町内会長に聞き取り調査を依頼して快諾を得ていたことから、約束の日時に、各公民館などにおいて、ウォーキング回廊実現への可能性や地区の歴史や産業についての聞き取り調査を実施した。

2017年度後期の地域社会専攻演習Ⅲにおいては、調査を踏まえて、内容の重複を避けるため班を一部改変した。A ルート班、B kids 班は変わらないものの、そのほかは、C 自然・

農業景観班、D 歴史班、E インフラ・商業施設班として組み直した。MAPは3種類作成することとし、調査結果をもとにそれぞれの班が担当する内容を調整して分担したうえで、各班ではマップへの記載内容について検討を重ね、絞り込んでいった。

作成したマップは、「水と緑のウォーキングマップ」と題し、「自然と触れ合う農業景観編」、「歩いて見つける歴史編」、「もぐもぐてくてく編」の3種類用意した。

当初はkids班が担当して子供向けのものを単独で作成する予定であったが、実際の行動は大人とともに行なわれ、かつ大人がマップを参照して解説しながらウォーキング・ハイキングを行なう場合子供専用のマップを用意する意味はあまり大きくない。くわえて予算の制約から、子供専用のマップの作成は断念し、子供でもわかりやすい内容と、買い物や飲食ができるポイントを掲載したマップを「もぐもぐてくてく編」として用意した。

各班において、それぞれの研究テーマがこの地域においてどのような意味を持ち、どのようにマップ作成に反映させるべきかを検討した結果をまとめたのが本報告である。各分野班が導き出した結論は、それぞれの章の最後に記されている。

本研究にあたっては、富木地区環境保全協議会の富木攻氏をはじめ、天下原町内会田中一成氏、神吉町内会山脇徹氏、宮前町内会原淳一氏、富木町内会久保寛氏、兵庫県東播磨県民局加古川農林水産事務所の平野氏のご協力を得た。また、ふれあい里山会神吉、加古川ウエルネスパークの職員の皆様にもご協力頂いた。とくに、9月の本調査では、館長の緒方勢吉氏より許可をいただき、加古川ウエルネスパークの玄関脇に机をお借りして、調査時のベースとさせて頂き、本学の幟を掲げた。

11月21日に予定されていた兵庫県東播磨夢会議において、学生が本研究の研究経過を踏まえた発言を行なう予定であったが、不運にも季節外れの台風接近で中止となってしまった。その代わりに募集された「「兵庫2030年の展望(仮称)」に係る意見・提案」に、各班の研究報告執筆によって得られた結論部分を記載して提出する機会を兵庫県東播磨県民局ビジョン担当班より頂いた。

以上を記して、厚く御礼申し上げます。

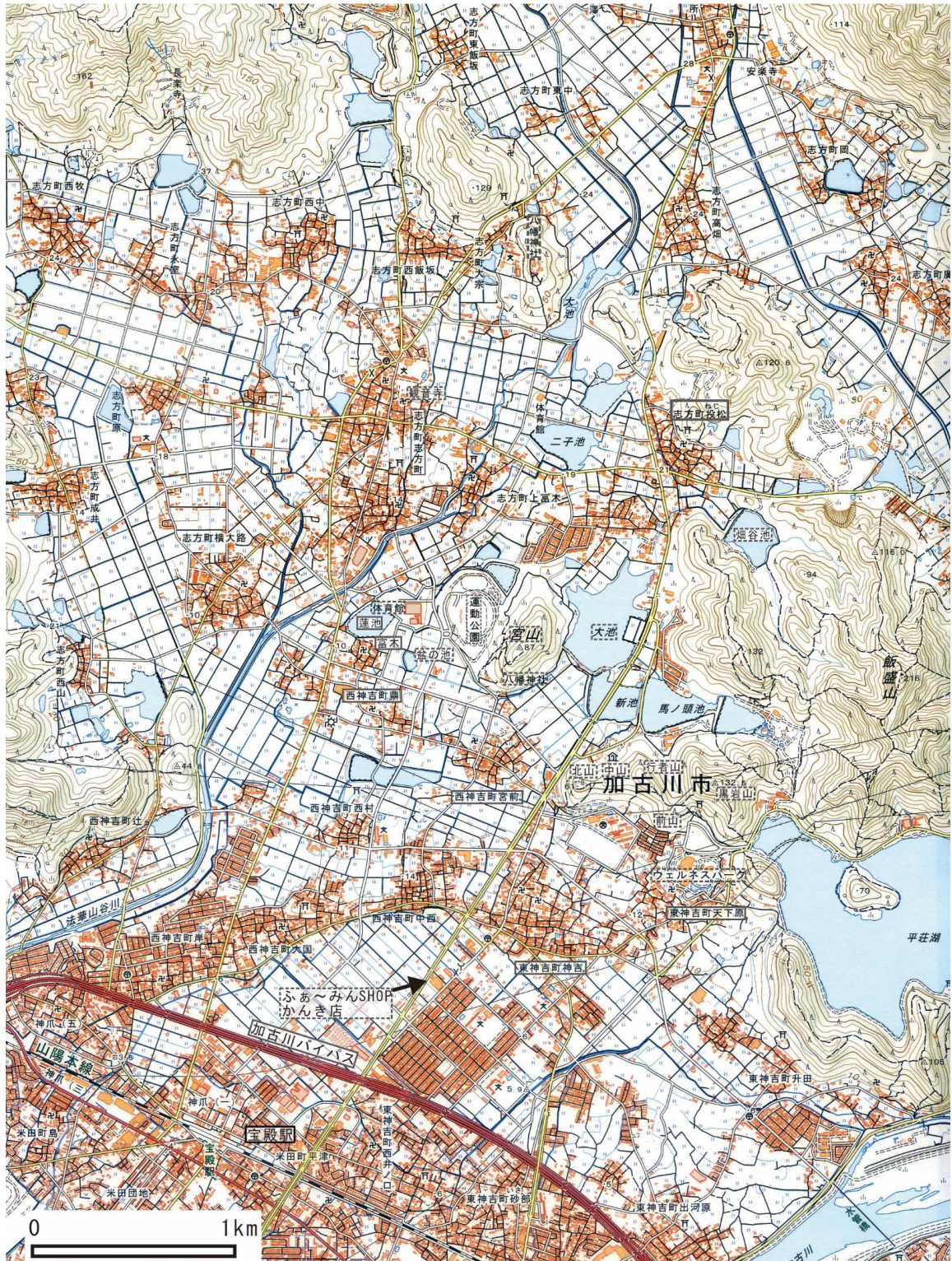


図1 研究対象地域の兵庫県加古川西部の概観  
 国土地理院2万5千分の1地形図「加古川」(2018年調製)に加筆。

## Ⅱ 加古川市西部地域における水と緑のウォーキング回廊のルート検討にあたって

ルート作成班

竹ノ内悠紀 花田佳布 井口和希

### 1. はじめに

一般社団法人日本ウォーキング協会によると、ウォーキングは、人が人として生きる上で一番重要な機能であり、いかなる生活の活動の場でも、自立して生きる上で必要な機能である。そして、人がより活性化するための運動であり、スポーツでもある。子どもから大人まで、ウォーキングをすることで自らの健康づくりの役割を担っているのである。

阪急交通社 2014 年ニュースリリース「健康とライフスタイル」アンケート調査によると、近年、ハイキングやウォーキングを行う人々は増加してきている。人々のハイキングやウォーキングへの関心は高く、健康面で良い結果が得られることが期待される。例えば、スポーツ店でハイキングやウォーキングのコーナーが増えたり、2010 年 8 月 7 日の読売新聞東京夕刊の記事によれば、「山ガール」という言葉が流行し、2010 ユーキャン新語・流行語大賞候補語にも選ばれた。人はなぜハイキングやウォーキングを行うのか。

神戸学院大学人文学部 2017 年度 3 回生矢嶋ゼミでは、2017 年 9 月 8 日～10 日の 3 日間、加古川市西部地域を対象として、里山とため池をつなぐ水と緑のウォーキング回廊の構想を実現するためフィールドワークを行った。そのために地域にある自然、農業景観、歴史などの魅力を見出し、それらを織り込んだウォーキングマップを作成することになった。

加古川市西部地域では、ツデーマーチというウォーキングイベントがある。ウォーキングに向く里山やため池、水田や畑があり、ハイキング向きの小山には登山コースが設けられているにも関わらず、研究対象地域で私たちが見た限りでは、ハイキングやウォーキングに訪れる姿をほとんど目にしなかった。

調査の中で、対象地域には加古川ウエルネスパークや加古川市総合体育館および総合陸上競技場といった健康促進施設があるものの、ウォーキングやハイキングにおいては、積極的に活用されていないと感じ、活用できる可能性を感じた。

そこでルート作成班では、加古川市西部地域において、自然と歴史を感じながら、里山とため池をつなぐウォーキング回廊で、安全に楽しくハイキングやウォーキングができるようにルートを作成することを目的とする。その際、構想したウォーキング回廊のルートの周辺には、自然・農業景観を目にすることができる地点や、歴史を感じることができる史跡が多数存在するため、これらが含まれるルートを設定した。またルートを一本に限らず、複数のルートを設定することによって、ハイキングやウォーキングをする人自身にあったコースで歩いてもらえるようにした。

研究は以下の通りに進める。2 節では、ハイキングやウォーキングを行うことについての意義について考える。3 節では、ハイキング・ウォーキングルートを作るにあたっての課題と注意点について述べた上で、ルートへどのように反映したか述べる。4 節では、本研究結

果を振り返る。

## 2. ハイキングやウォーキングを行うことの意義

ハイキングやウォーキングの魅力は、日帰りで楽しむことができ、軽装で参加できることである。また初心者でも気軽に参加できるのが最大の魅力である。波多野(2008)によると、摂取した栄養分の中でも脂肪分燃焼のためには有酸素運動が有効だということが知られている。それをウォーキングに当てはめると、毎分120回程度の心拍数で10分以上歩き続けることで有酸素運動につながる。ウォーキングは短時間で脂肪分を燃焼できるスポーツである。それとともに自然・農業景観、史跡などを目にしたり、触れたりすることができる。

さらに、意識してウォーキングをすることで、慣れ親しんだ街であっても新しい発見をすることができる。普段生活している時には気にすることがほとんどない坂道でも、なぜそこが坂なのか、なぜ道が曲がっているのか、あえて疑問をもって地形を見ることで全く新しい土地の歴史が見える。また、史跡があるならば、昔の人々の姿を思い浮かべ、今につながる景観への意味を知り、知的好奇心が満たされるであろう。さらに、歩く中で家族や仲間とのコミュニケーションも図ることもできる。京阪神エルマガジン社が2017年に発行した『おとなのエルマガジン日帰り歩く旅 [関西版]』の序文には、有名スポットで写真を撮るだけでなく、歴史を学んで教養を深め、自分で歩き、家族と仲間と感動を共有することが普通の街暮らしをふくよかにすると述べており、ハイキングやウォーキングの重要な意義の一つといえるだろう。

## 3. ハイキングルートやウォーキングルートを作るにあたっての課題と注意点

### (1) 課題

加古川市西部地域でため池と里山をつなぐウォーキング回廊を考えるにあたって、里山やため池、農業景観、史跡を組み込み、加古川の自然や歴史を感じることができるルートを構想した。しかし、どの年代の人もこれらにたどり着くための安全性がなければ、ハイキングやウォーキングを安心してできない。そのため、フィールドワークで神吉山、黒岩山、宮山といった里山や、畑谷池、蓮池、盆の池、神吉大池といったため池を巡るルートの安全性、そして周辺道路の交通量を確認した。ルート作成班が担当したのは、「水と緑のウォーキングマップ」の「自然と触れ合う農業景観編」、「歩いて見つける歴史編」、「もぐもぐてくてく編」の上部に共通して設けた案内文とウォーキングの心得(注意点)、およびマップに設定した主要ルートである。

#### ①神吉山

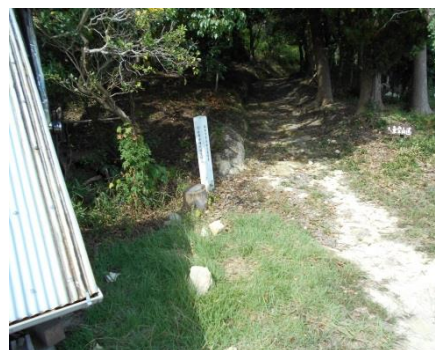


写真1 神吉山東登山道

2017年9月9日 松岡撮影

神吉 N 班によるふれあい里山会神吉会長の山脇徹氏への聞き取り調査によると、神吉山では、2010 年から東神吉小学校 3 学年と年 1 回植樹や森の観察会を行っている。その他にも 12 月に町内会主催のウォーキングを実施している。

実際に神吉山を登った神吉 N 班によると、入山から登頂、下山までかかった時間は約 30 分であった。ふれあい小屋から始まる東登山道は、部分的に階段も整備され、安全が確保され、歩きやすかった。そのため、ルートに組み込んでもどの年代の人であっても楽しめる。

## ②黒岩山

神吉 N 班の現地踏査によると、黒岩山の毘沙門堂付近の登山道には手すりや階段が設置されているが、それを抜けると傾斜のきつい一枚岩で覆われている部分があり、三点確保をしなければ登山できないレベルであった。また、手入れも行き届いていないためか、頂上から平荘湖へ下る登山道は、生い茂った草に覆われていた。また、コースを示す赤ペンキで書かれた矢印の色が薄くなっており、わかりにくくなっていた。しかし、頂上から南東方向には平荘湖や明石海峡大橋、淡路島が、南西には家島諸島が一望できた。



写真 2 黒岩山の一枚岩

2017 年 9 月 9 日 松岡撮影

以上から黒岩山は、雨天時や、子供や体力のない高齢者のハイキングやウォーキングには多少の注意が必要といえるだろう。しかし、雨天時以外の大人向けとしては問題ないといえる。なお、多くの人に利用してもらうためには、登山道の道しるべやコースガイドの整備や、草刈りが必須といえるだろう。

## ③宮山

宮山には頂上を目指すルートとふもとを周回するルートがある。宮前・宮山班による宮前町内会長の原淳一氏への聞き取り調査によると、宮山では年に 1 回草刈りを実施している。しかし、草刈り前の時期の宮山の頂上付近では、場所によって草が道を覆っているところが見られたので、時期によっては注意が必要である（7 月 16 日の現地踏査時）。なお、宮山頂上の北側から北北東方向に踏み跡があるが、神吉八幡神社そばの宮山登山口にあるコースガイドには、ルートとして記されていない。また、宮山を周回する東側の道路は一般車両が通るが、アスファルト舗装がされており、交通量も少ないことからルートへ組み込んでも問題はないだろう。なお、コースガイドが老朽化しており、改善が必要である。

## ④畑谷池

志方町投松に位置する畑谷池の踏査を行った宮前・宮山班によると、畑谷池の周辺には歩道が設置されている。近くで農業を営む早瀬氏への聞き取りによると、かつて畑谷池では、桜の木を 50 本植えるプロジェクトが行われていたが、今では枯れてしまったとのことである。なお、9 月 8 日の現地踏査時には、この歩道沿いの竹林でスズメバチが見られたことから注意が必要である。さらに、池には柵がないために、水辺に近づくことができるが、小さ



い子供がいる際には、注意が必要である。

#### ⑤神吉山から畑谷池へ向かう主要地方道高砂北条線

神吉山から畑谷池へ向かって歩いていくには、主要地方道高砂北条線を歩いていくことになる。この道路には、歩道が設置されているところとされていないところがみられ、特に神吉大池と畑谷池の間では、道幅が狭くなり、歩道もなくなっていることから歩行にあたって注意が必要である。そのため、神吉山から畑谷池へ向かう際には、高砂北条線を通らず神吉大池の北西側を抜け、志方町上富木の住宅街を通る道を通ったほうがいだろう。農家が並ぶ景観はもちろん、住民との会話を楽しめるかもしれない。

#### ⑥蓮池

富木班によると、蓮池の周りは、堤の上を含めて道が整備されている。ただし2017年9月時点で、池の南西側の堤の上は、ガードレールや柵がないため、小さい子供を連れて歩く際には、多少の注意が必要である。堤の池側には、コンクリートタイルがはられていて滑りやすく、池に降りることは困難である。堤の上から景色を楽しみたい。

#### ⑦盆の池

富木班によると、盆の池の堤は、一車線の農道になっている。池には柵がないため、小さい子どもを連れて歩く際には多少の注意が必要だろう。堤の上からは、富木地区を一望できる。

#### ⑧農業景観

宮前地区では、米や大麦の栽培や、兵庫夢錦という酒米の生産が行われている。秋にはコスモス祭りが行われており、宮前地区周辺の北側の畑に多くのコスモスが咲き、コスモス祭りのイベントも催される。しかし、初夏に麦栽培による麦秋がみられる場所や秋のコスモス祭りの場所は毎年変わるので、注意が必要であろう。

#### (2) ルート設定の注意点

安全に楽しくハイキングやウォーキングを行うために、各地点における注意点を示す必要がある。さらに、景観などを楽しんでもらうためにも様々な箇所をルートに組み込む必要がある。各地点における注意点を挙げてみた。

##### ①宮山に関する注意点

宮山では、草刈り時期前の頂上付近では、草がおおっているところが生じうる。歩く際には多少の注意が必要である。そのため、宮山のふもとを周回できるルートも設置した。

##### ②休憩箇所について

夏季には、長時間歩くことで熱中症に陥る可能性がある。そのために屋内で休憩したり、トイレに行けたりできるように加古川ウエルネスパーク、加古川市立総合体育館をルートに組み入れた。ここでは、ロビーなどで休憩できる。また、神吉八幡神社の拝殿そばには、休憩できるスペースがありトイレも設置されていることから、ルートに組み込んだ。

##### ③自然や農業景観を楽しむことができるルートの組み込み

今回設定したルートには加古川の自然も楽しんでもらうために、神吉山や宮山などの里

山をルート内に組み込んだほか、地域にあるため池も組み込んでいます。またこの地域で行われている農業について知ってもらうためにルートに農地が広がっている場所を組み込んでいます。四季折々に様々な農業景観が見られ、初夏の5~6月には麦秋を、秋には黄金色の稲を見ることができる。

#### ④歴史的な名所のルートへの組み込み

この地域には、神吉八幡神社、観音堂、石棺仏といった歴史的な名所が数多く存在しています。里山や池といった自然だけでなく、歴史や文化も感じてもらうために、これらの歴史的な名所をルートへと組み込んだ。

#### ⑤神吉山から畑谷池へ向かう際への迂回ルートの組み込み

神吉山から畑谷池へ向かう際、主要地方道高砂北条線を使うのが最短ルートであるが、神吉大池の北東側から北側では、迂回ルートを組み込んだ。

#### (3) ウォーキングルートへの反映

以上の点をふまえ、ルート作成班は、加古川ウエルネスパークと加古川市立総合体育館をつなぐようにルートを設定した。その中で、まず自然を感じるために、里山、ため池を通ることができるよう、神吉山、黒岩山、宮山、神吉大池、新池、畑谷池をルート内に組み込んだ。

神吉山は安全性が比較的高い上、歴史的な名所が多いために、登山ルートに組み込んだ。一方、黒岩山は子どもや高齢者の安全性への配慮から今回はルートから外した。なお、宮山については、草が覆う草刈り直前の時期を考慮し、宮山を周回する道もコースに組み込んだ。

また、加古川の歴史を感じることができるように、神吉八幡神社などを含めた計11カ所の歴史的な名所がルートに含まれるか近接するようにした。

その他として、この地域では農業も盛んであり、夏から秋には広大な水田、秋にはコスモス畑、冬から春にかけては麦畑が見られる。これらの農地もルート内へと組み込んだ。

## 4. おわりに

本研究では、加古川市神吉町を対象に、自然と歴史を感じながら安全に楽しくハイキングやウォーキングができるようにルートを検討し設定を考えた。2節では、ハイキング・ウォーキングを行うことについての意義を述べた。3節では、ハイキングルートやウォーキングルートを作るにあたってそれぞれの場所での課題と注意点、さらにはウォーキングルートの反映について述べた。

このハイキングルートやウォーキングルートの特徴として、ルートが複数用意されている点が挙げられる。これによって、何度この地を歩いても、異なるルートを歩くことができ、その人に適した距離や歩き方ができるのである。また、宮山、神吉山をルートに取り入れることで、普通、歩いて山に登ることがあまりない人にとってもよい機会となるのである。宮山、神吉山をルートに取り入れることで、普通、歩いて山に登ることがあまりない人にとってもよい機会となるのである。

自分ならどこを歩いた方が楽しくハイキングやウォーキングができるかという気持ちになることで、よりよいルート設定を考えられたと思う。

ルートは大きい道ばかりではなく、農村の中の道が入り組むところも通っており、地域の方たちと軽い挨拶や話をしたりふれあったりすることができる。また、景観や歴史、史跡、自然、農業といった加古川の魅力を実際に訪れ、肌で感じることも特徴である。ただ歩くだけでなく、楽しみながら歩いてほしいと考えている。

このルートを考えるにあたって、実際にその土地を歩き、安全面に配慮した。子供から高齢者といった幅広い世代や、家族で利用してもらいたい。人々の健康への手助けとしてこのハイキングやウォーキングコースを歩いてもらい、さらに、自然を肌で感じてもらえればと思う。ハイキングやウォーキングをする人にとっても少しでも健康な身体づくりの手助けとなればうれしく思う。

#### <参考文献・ホームページ>

京阪神エルマガジン社 (2017) 『おとなのエルマガジン 日帰り歩く旅 [関西版]』

波多野義郎 (2008) 『健康ウォーキングの科学』 不昧堂出版

読売新聞 2010年8月7日東京版夕刊「とれんど 増える「山ガール」」

自由国民社ホームページ 「ユーキャン新語・流行語大賞 候補語」

<http://singo.jiyu.co.jp/old/index.html> (2018年1月27日閲覧)

日本ウォーキング協会ホームページ「協会概要」

<http://www.walking.or.jp/about/> (2018年1月27日閲覧)

阪急交通社ホームページ「2014年ニュースリリース」「健康とライフスタイル」アンケート調査」<http://x.hankyu-travel.com/pdf/hankyu-travel/141015.pdf> (2018年1月27日閲覧)

### Ⅲ 加古川市西部地域における自然・農業景観を活かした水と緑のウォーキング回廊

自然・農業景観班

趙欣鑫 松岡晴季 山田修太郎

#### 1. はじめに

佐藤（1989）によると、農村に期待される主要な役割の一つに、レクリエーション活動の場がある。自然景観が残り、農地が広がる農村部は、都市部の住民にとってウォーキングやハイキング、ツーリング、農業体験などの対象となる地域であり、自然景観や農業景観、農業そのものがそのための資源となっている。

加古川市ホームページ「かがわ・新概念ウォーキングコース」には、加古川市内 12 か所の公民館をスタート地点とゴール地点とし、地域に点在している遺跡を巡るコースや、川や緑、ため池を眺めるコースなど、歴史や自然、農業景観をテーマにした計 31 コースのモデルコースが設定されている。このように、加古川市は多くのウォーキングコースを作成しており、ウォーキングに力を入れている。しかし、今回の研究対象地域に位置する自然や史跡は、これらのコースにほとんど含まれていない。

農林水産省ホームページ「農村地域・農村集落の現状」によると、現在の日本における人口推移では、都市部の人口は年々増加傾向にあるのに対し、農村部の人口は減少傾向にある。将来的にも農村部の人口は減少する一方であり、2010 年時点での農村部の人口比率は 32.7% であるが、2035 年には 30.2% に低下するとされており、将来的にも人口が都市部へと移動する方向に向かうとされている。農村部における自然景観、農業景観を荒廃させないためには、保全を行う担い手が必要である。この傾向が続くことでさらなる過疎化が予想されている農村部において、自然景観を保全し農業を持続する担い手も減ってしまうことが懸念されている。

神戸学院大学人文学部 2017 年度 3 回生矢嶋ゼミでは、2017 年 9 月 8 日～10 日の 3 日間、加古川市西部地域を対象として、里山とため池をつなぐ水と緑のウォーキング回廊の構想を実現するためフィールドワークを行った。そのために地域にある自然、農業景観、歴史などの魅力を見出し、それらを織り込んだウォーキングマップを作成することになった。

自然・農業景観班では、この地域における自然景観、農業景観を活用したウォーキングルートを作成した。2017 年に加古川市西部地域において 3 度に渡って行ったフィールドワークにより、加古川市西部地域には豊かな自然景観や農業景観がみられるということがわかった。しかし、注意が必要な場所も存在する。そこで、自然・農業景観班では、研究対象地域の自然景観・農業景観を活用したウォーキングマップを作成する上で、どのようなものを取り入れることで魅力的なウォーキングルートが設定できるのかということについて検討する。また、この地域の魅力である自然、農業景観を、どのように将来にわたって保全していくかについても考える。

加古川市景観まちづくり条例では、加古川は豊かな水と緑の景観に恵まれたまちであると記載されている。特に加古川市西部地域は、山に囲まれ、ため池が多数あり広い農地がみられ、加古川市の中でもより豊かな水と緑の景観に恵まれた地域といえる。これらのことから、この地域は自然景観や農業景観を活かしたウォーキングのマップを作成できるのではないだろうか。

研究は以下の通りに進める。2 節では、貴重な地質、地形を活用したジオツーリズムを、先進国と日本における取り組みを比べた上で、研究対象地域における自然景観、農業景観を活用したウォーキングの可能性について言及する。3 節では、加古川市西部地域においてウォーキングルートを設定する上で、どのようなポイントを紹介するとこの地域の価値が見いだせるかについて考えた。以上のことを踏まえ、4 節では自然景観、農業景観を用いた観光推進の可能性について述べた。

## 2. 加古川市西部地域の自然・農業景観は観光資源となり得るのか

### (1) 観光資源としての自然景観

昨今、観光は多様化していると言われている。大きく2つに分けて地域の観光資源である生産物、特産物を活かした観光と、人々の自然、歴史、文化への関心や興味に基づいた観光がある。後者の観光資源には、山、海、植生、温泉などの自然観光資源、史跡、農村や都市の景観、テーマパークなどの様々な観光資源が含まれる。

横山(2014)によればジオツーリズムは、貴重な地質露頭や地形などが残る土地や景観を保全し、教育に活用する観光形態であり、環境に優しい観光である。ジオパークは考古学、生態学、文化的な価値がある大地の遺産の公園を指す。大地の遺産を保全、保護することを前提としてそれらを活用するジオツーリズムなどを通して、地域の持続的な活性化が求められる。

日本ジオパークネットワークホームページによれば、2017年12月現在、日本には、洞爺湖有珠山ジオパーク、島原半島ジオパーク、阿蘇ジオパークの、8地域の世界ジオパークがある。また、日本ジオパークとして43の地域がある(うち8地域は世界ジオパークとなっている)。火山と人間共生の営みが見られる地域が多く、日本のジオパークの大きな特色の一つとなっている。日本ジオパークに認定された桜島錦江湾ジオパークを事例に説明する。火山活動から生まれた錦江湾は、深い内海に生息している生物の種の多様性が高い。火山地帯の土地に適した桜島大根などの栽培や錦江湾で魚の養殖、シラス製品や観光業が発展している。ジオパークに認定されるには、地域住民やNPOが主体的な取り組みを行っている点が要求される。桜島錦江湾ジオパークでは、2002年8月に桜島の自然と文化を楽しむ任意団体「桜島友の会」からNPO法人桜島ミュージアムが発足された。現在、多くのイベントを実施している。NPO法人桜島ミュージアムは専門知識に基づく講演、現地において解説も行う。桜島にある素晴らしい財産を再発見し、その情報を世界中に発信している。

横山（2014）によれば、ドイツやオーストラリアでは「ジオ小道」が設けられている。地元の町の何気ない遊歩道沿いに訪問者の知識を深める看板が設置されており、単なる散歩地や周遊道の看板ではなく、森の歴史やそこに生息する動物や植物の解説看板であり、訪問者の興味を引くような工夫がなされている。また、ジオ小道の看板から得られる情報は多く、設置によって訪問者がその場の地質構造や地史なども理解することができる。その他にもヨーロッパの保護地域や自然公園では、植物・歴史・文化・景観などに関するテーマに沿った遊歩道が設置されている。

加古川市西部地域においても、歴史的建造物や史跡の訪問、あるいは自然エリアを観察するような観光を推進することが可能ではないだろうか。調査対象地域周辺では豊かな自然景観が存在する。周辺のため池、里山、史跡などは、ジオ小道の様な自然景観を活かした魅力的なウォーキングルートを作成していくうえで、十分な観光資源と言えるであろう。特に、池を取り囲む里山の風景がヒスイ色の池に映る様子は農村地域の特別な観光資源と言える。こうした地域の観光資源を保全し、農村地域の特別な付加価値として位置づけていくことにより、豊かな自然景観や動植物を活かした加古川西部地域版のジオ小道を形成することは可能ではないだろうか。また凝灰岩を切り出していたとされる神吉山の石切り場は、この地域におけるジオパーク的な観光資源の1つと言えるだろう。

加古川市東神吉町の神吉町内会の一組織であるふれあい里山会は、事例に挙げた NPO 法人桜島ミュージアムのように、地元の小学生を対象に里山で植樹や炭焼き・クラフトのイベントを行っており、小学生に里山の自然や文化を知ってもらう機会を提供している。児童は授業を通して地元にある動植物について学ぶことができる。これにより里山の自然の魅力が伝わるし、自然と密接な関係にある人の暮らし、自然と文化などについて関心をもってもらえるのではないだろうか。

## (2) 観光資源としての農業景観

農業景観が観光資源として活用されている例として、日本農業遺産が挙げられる。農林水産省ホームページ「世界農業遺産・日本農業遺産」によると、日本農業遺産は、日本において重要かつ伝統的な農林水産業を営む地域を農林水産大臣が認定する制度である。日本農業遺産認定基準は、8つの基準と保全計画に基づき評価される。その中にランドスケープ及びシースケープの特徴を有することという項目が存在する。農林水産省ホームページ「世界農業遺産・日本農業遺産」によれば、ランドスケープとは、土地の上に農林水産業の営みを展開し、それが呈する1つの地域的まとまりであるとされ、またシースケープとは、里海であり、沿岸地域で行われる漁業や養殖業等によって形成されるもの、とそれぞれ定義されている。以上のことから、農業を行っている景観が観光資源の役割を果たすということが考えられる。

世界農業遺産に認定されている新潟県佐渡市では、トキをシンボルとし、様々な生きものが生息できる環境を整えるために「生きものを育む農法」に島全体として取り組まれており、1年を通して生きものが生育できる環境が作られている。またこの地域では減化学肥料、減

化学農薬など環境に配慮して作られた米が「朱鷺と暮らす郷」の名称でブランド化されているとされる。

以上のように、日本各地にそれぞれの農業景観を活かして農業遺産認定を受けている地域が存在する。

### 3. 加古川市西部地域における自然・農業景観を活用したウォーキングルート設定のための課題

自然・農業景観班では、ウォーキングルートを設定するにあたって、調査対象地域の自然、農業に焦点を当てて検討した。第3節では現地調査や聞き取り調査によって明らかとなった各所の魅力や課題を示した。なお、自然・農業景観班が担当したマップは、「自然と触れ合う農業景観編」である。

#### (1) 神吉山

矢嶋ほか(2017)によれば、神吉山は東神吉町神吉地区の北部に位置し、北山・中山・行者山・小山(前山)の総称である。10分程で登頂が可能で、山頂からは加古川の市街地から海岸沿いに広がる工場地帯に至るまで広く見渡すことができる。登山道は神吉町内会の一組織で、地域住民によって結成されている「ふれあい里山会」によって整備が行われている。ふれあい里山会は主に60歳以上の男性で構成されており、神吉山の整備や管理はそのメンバーによってボランティアで行われている。神吉町内会長山脇氏からの聞き取りによると、神吉山ではメジロやホオジロなどの鳥類や、マツ、コナラなどの植物が多様であるとのことである。また、これらの情報は、町内会による小学生向けの学習資料となっている。2017年6月でのフィールドワークにおいて、ふれあい里山会の活動を実際に目にした。その際に肥料として用いるために腐葉土を作っていたほか、景観向上のために花を植えている姿が確認できた。

#### (2) 黒岩山

黒岩山は神吉山の東に位置する山である。神吉山より標高が高く、より遠くまで景色を見渡すことができる。登頂に約30分、下山も約30分で、低山ハイキングを行うのに適した山である。黒岩山をウォーキングルートに組み込むことができれば、低山ハイキングやトレッキングを行いたい人を呼び込める可能性がある。

2017年9月9日に頂上付近に沼田場を確認している。沼田場とはイノシシやシカなどが体表についている寄生虫などを落とすために泥を浴びる場所のことである。イノシシは夜行性で警戒心が強いいため滅多に見ることはないし、安全への配慮が必要ではあるものの、生息の痕跡を観察することができることは、魅力の一つとも言えるのではないだろうか。

#### (3) 田畑

米と麦による二毛作が行われ四季折々に様々な様相を見せる加古川市西部地域の田園風景は、この地域の観光資源の1つと言えるだろう。6月上旬には収穫期を迎え黄金色に輝く大麦、8月には青々と伸びる稲、9月から10月にかけては実をつけ頭を垂れる稲穂を目に

しながらウォーキングをすることができる。また、収穫を終えた穂刈田も農村ならではの景色と言える。

調査対象地域の田畑の活用事例として挙げられるのが天下原地区、宮前地区の「コスモスマつり」である。10月末から11月にかけて開催されるこの地域の代表的な観光資源の1つと言える。景観は魅力的であり、集客性のあるイベントと言える。国の減反政策に則り使用しない田畑の活用としてコスモスが植えられたものとみられる。コスモス祭りが終わり枯れてしまった後も、田畑にすき込まれることによって肥料となるため無駄がない。しかし、2018年で国の減反政策が終了することから、日本全国において使用しない田畑の利用方法が変更される可能性が生じている。この地域の景観も変化する可能性があるため、今後の動向に注目したい。

調査対象地域の水田では、ヘアリーベッチという藤の花のようなマメ科の緑肥作物が見られることもあげられる。兵庫県ホームページ「知ってください・食べてください。東播磨の農畜水産物!!」によると、東播磨地域では、ヘアリーベッチを育て、田にすき込むことにより減化学肥料、減化学農薬で安心・安全な米づくりに取り組んでいる農家が多数みられるとのことである。また、その栽培米はひょうご安心ブランドに認定されている。4月から5月のウォーキングに適した時期に、来訪を歓迎するかのように咲き乱れている。

#### (4) ため池

第2節でも取り上げた通り、ため池は観光資源としての魅力を秘めていると言える。池周りの散策や、水とのふれあい、池に降り立つ野鳥の観察など、様々な利用方法が考えられる。野鳥の観察では、山地の林や農耕地を好む鳥類の観察を行うことができるのではないだろうか。

水と触れ合う機会として、富木地区の蓮池、盆の池ではかいぼりがおこなわれている。かいぼりとはため池の水を抜く行事である。かいぼりを行う主な理由としては、池の水質改善、外来生物の駆除、池の底の土を畑の肥料として採取することなどが挙げられる。富木地区では年に1度、蓮池か盆の池のどちらかで交互にかいぼりが行われている。地域住民にとっては毎年の恒例行事という認識かもしれないが、かいぼりに縁のない人たちからすると自然体験が行える貴重なイベントとなるのではないだろうか。

かいぼりは、東京都の井の頭公園でのかいぼり活動が全国ニュースで取り上げられるなどして、認知度が高まってきていると考えられる。井の頭恩賜公園100年実行委員会によると、2016年に井の頭公演で実施されたかいぼりでは、見学者含め約3万人が参加した。今回の研究対象地域とは人口規模や交通の便などにおいて大きな違いがあるものの、多くの人がかいぼりに関心を抱いていることが分かる。富木地区のかいぼりの情報や魅力を発信していき、多くの人たちが興味を持って参加するようなイベントに発展させることで、新たなこの地域の特色として打ち出していけるのではないだろうか。

#### (5) 宮山

宮山は神吉山の西方に位置し、ふもとに神吉八幡神社がある山である。宮山は一帯が古墳



となっているため、宮山に登ることによって古墳の歴史などに触れられるように整備を行えば、史跡などに興味がある人たちもウォーキングに参加する意義を与えることができるのではないだろうか。

宮前町内会長の原氏への聞き取りによると、宮山は岩山で本来は植物が少なかったため、土砂崩れ防止のために植林が進んでいった山である。フィールドワークでは等間隔に植林されたヒノキを確認することができた。近年間伐が行われたことにより、適度に光が差ししており、今後、植物の多様性も見られるようになると考えられる。ナナフシやクワガタなどの昆虫も確認でき、動植物の観察も十分に行うことができると思われる。自然体験を行う機会が減少している都市、または都市近郊に住まう人たちにとって、このような自然観察が行えるということは、魅力的なことなのではないだろうか。

#### 4. おわりに

本研究では、研究対象地域の自然景観・農業景観を活用したウォーキングマップを作成する上で、どのようなものを取り入れることで魅力的なウォーキングルートが選定できるのかということについて考えた。

2節では、海外で設定されている「ジオ小道」に、その山に生息する生物や植物、その場所の歴史を看板に記すことにより観光客に加古川市西部地域に対する関心を持ってもらえる可能性があるということ述べた。さらに加古川市西部地域に位置する神吉町内会におけるふれあい里山神吉の取り組みでは、地域の自然や文化について学べる機会があり、地域住民が地元の魅力に気づくことが出来るような機会があるという点において、桜島錦江湾ジオパークと共通する点があったことがわかった。そして3節では、現地調査の結果をもとに各地区の自然・農業景観を活用したウォーキングルート設定のための課題について述べた。

第2節で紹介したジオ小道では、地質構造や地史などを理解することができるという性質があることから、神吉山の日露戦争役記念碑や石仏に使われた凝灰岩を切り出したとみられる石切り場を説明する看板を設置することで、この地の魅力を地域住民や観光客に発信することができるのではないだろうか。

3節で述べたポイントは加古川市景観まちづくり条例で述べられている内容に当てはまっている。自然・農業景観班では研究対象地域の魅力を発信するために、これらを基にウォーキングマップを作成した。農村部における自然景観、農業景観を維持、向上させるには、保全活動を行う担い手が必要である。研究対象地域では、ふれあい里山会が神吉山の保全と、小学生を対象としたレクリエーションを行っている。幅広い世代間の交流を図り、地域住民に里山への興味を持ってもらう役割を果たしているといえる。このような団体の存在は不可欠である。農村部から都市部へと人口が移っている現状において、地域住民自身が普段から見慣れた里山の魅力に気づき保全活動を行っていくことにより、それを活かした地域振興の可能性がある。多くの地域住民に自然・農業景観を地域の良さとして認識してもらうことが、この地域の観光推進の第一歩なのではないだろうか。

## <参考文献・ホームページ>

- 佐藤洋平 (1989) 「農村」 河村武・高原榮重編『環境科学Ⅱ人間社会系』朝倉書店、pp. 239-255
- 平野勇編 (2008) 『ジオパークー地質遺産の活用・オンサイトツーリズムによる地域づくり』オーム社
- 矢嶋巖・神戸学院大学人文学部人文学科地域社会領域 2016 年度地域社会専攻演習Ⅲ (矢嶋ゼミ) 履修生 (2017) 「都市近郊農村のよりよい生活環境を目指してー加古川市東神吉町神吉山を中心とするフィールドワークからー」神戸学院大学地域研究センター編『都市郊外地域における大学と地域との協働に関する研究成果報告書』、pp. 1-33
- 横山秀司編 (2014) 『ジオツーリズム論』古今書院
- 井の頭恩賜公園 100 年実行委員会公式サイト  
<http://inokashirapark100.com/> (2017 年 12 月 20 日閲覧)
- 加古川市ホームページ「ウェルネス推進課」  
<http://www.city.kakogawa.lg.jp/soshikikarasagasu/kyodo/wellnesssuishinka/index.html> (2017 年 11 月 27 日閲覧)
- 加古川市ホームページ「加古川市景観まちづくり条例」  
[http://www.city.kakogawa.lg.jp/hp/reiki\\_int/reiki\\_honbun/k312RG00000528.html](http://www.city.kakogawa.lg.jp/hp/reiki_int/reiki_honbun/k312RG00000528.html) (2018 年 1 月 18 日閲覧)
- 日本ジオパークネットワークホームページ「ジオパークとは」  
<http://www.geopark.jp/> (2017 年 12 月 13 日閲覧)
- 農林水産省ホームページ「農村振興」  
[http://www.maff.go.jp/j/nousin/kantai/giahs\\_1.html](http://www.maff.go.jp/j/nousin/kantai/giahs_1.html) (2018 年 2 月 21 日閲覧)
- 農林水産省ホームページ「農村地域・農村集落の現状」  
[http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w\\_maff/h23\\_h/trend/part1/chap4/c4\\_2\\_01.html](http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h23_h/trend/part1/chap4/c4_2_01.html) (2018 年 1 月 23 日閲覧)
- 兵庫県ホームページ「知ってください・食べてください。東播磨の農畜水産物!!」  
<https://web.pref.hyogo.lg.jp/ehk08/documents/nou-tiku-sui-sanbutu.html> (2018 年 1 月 25 日閲覧)
- 文部科学省ホームページ「体験活動の教育的意義」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm) (2017 年 11 月 24 日閲覧)

#### IV 加古川市西部地域における歴史を活かした水と緑のウォーキング回廊

歴史班

川村恭平 加納佳奈 尾崎駿介 大谷貴之

##### 1. はじめに

地域には、多くの人には知られていなかった史跡や寺社仏閣などが多数存在し、それぞれの歴史を有している。これらを地域のために活かすことができないだろうか。

真田氏の城下町として知られる長野県長野市松代では、2004年から地域住民の手で文化財を活用し、手入れをしていこうとする、エコール・ド・まつしろの取り組みが行なわれている（エコール・ド・まつしろホームページ、朝日新聞2004年4月30日記事）。自分たちが住んでいるところの歴史を知ることで住民の地元愛や自信につながり、他地域から観光で訪れる人による集客効果や地域情報が他の人へ伝わり広報効果も持ち、地域の活性化につながるものと考えられる。

神戸学院大学人文学部3回生矢嶋ゼミでは、2017年9月8～10日にかけて、ため池や里山を生かした水と緑のウォーキング回廊構想の実現を目指して、加古川市西部地域のうち、東神吉町天下原地区、東神吉町神吉地区、同地区の里山である神吉山（北山・中山・行山・小山の総称）、西神吉町宮山地区、同地区の里山である宮山、西神吉町鼎富木地区を中心に、5つのグループに分かれて、現地の視察及び聞き取り調査を行った。それらをふまえて、この地域の史跡にスポットライトを当て、史跡ウォーキングに適したウォーキングマップを、歴史班が担当して作成することとなった。

2012年に発行された『ひょうご社寺巡礼2』では、兵庫県の神社や寺のさまざまな伝説や祭り、秘宝を擁する県内各地の社寺が、地域別にまとめられているが、この地域では、東神吉町神吉の常楽寺しか紹介されていなかった。しかし、加古川市西部には、あまり知られていないものの、史跡や寺社仏閣がいくつもある。2015年に発行された『Kako-Style2』では、加古川の文化・歴史・風土・生活に関する事柄が町名別に紹介されており、西神吉町・東神吉町の章において史跡・寺社仏閣は5件紹介されていた。加古川市西部の平荘湖岸に位置する、加古川市立少年自然の家が発行しているウォーキングマップには、上記には紹介されていない平荘湖に沈んだ史跡が紹介されている。ただし、施設を訪れた人に配ることを前提として作られており、外部に向けて発信されているようには見受けられない。

ほかにも、2014年に放送されたNHK大河ドラマ『軍師官兵衛』に関連して、加古川市の志方町や東神吉町を取り上げたマップなどが発行されたが、放送から時間が過ぎ、熱は下がっていると考えられる。ほかにも、加古川市西部地域が含まれるいくつかのウォーキングマップがあるが、発行している組織によって紹介する場所や説明の内容が異なっている。また、現地踏査で調べた限りでも、これまで発行されたマップや資料に紹介されていない歴史的な文化財があり、このマップではできる限り対象地域の史跡を掲載することとした。

このマップを活用して、東神吉町・西神吉町の史跡や寺社仏閣をめぐるウォーキングを行うことで、ウォーキングを訪れた人がこの地域の史跡や寺社仏閣を知る機会ができ、また、この地域においても住民自身が史跡を活用した「歴史ウォーク」を企画することが可能になるのではないかと考える。そのため、この地域にある史跡や寺社仏閣、歴史を有する地場産業を整理し、ウォーキングマップに活かしていくことが本研究の目的である。

以上の目的を達成するため、2節では、歴史を活かしたウォークの成功例を挙げ、その取り組み例を本研究対象地域でも取り入れることが可能か検討する。3節では、加古川市東神吉町・西神吉町の史跡および歴史を有する地場産業について述べる。以上を踏まえ、4節では、マップ作成にあたっての留意点とマップを活用した歴史ウォークの可能性について検討する。

## 2. 歴史を活かしたウォーク

### (1) 東海道五十三次ウォーク

歴史を活かしたウォークの例として文京学院大学で行事として実施される東海道五十三次ウォークが挙げられる(小栗 2007)。この目的は江戸時代に整備された五街道の一つで東海道にある53の宿場のうち、三重県の桑名宿から京都の三条大橋までの13の宿場を学生がウォーキングするものである。その目的として、健康の維持・体力の増進とともに、地球環境問題に気づき、行動でき得る「自立と共生」を養うこととしている。実際に歴史ある道を歩くことにより、「そこに何が起こっていたのか」、「何故、そうなったのか」、「これからどうしていけば良いのか」というプロセスに注目し、「学び」や「日常への変換」を図る野外体験学習法を取り入れたウォーキング教育になっている。

### (2) 銀の馬車道の歴史ウォーク

朝日新聞 2017年10月29日記事によると、兵庫県朝来市と姫路市の間には、明治時代に生野鉱山と播磨港を結ぶ馬車専用道路として建設された「銀の馬車道」がある。同年4月に日本遺産に認定されたことを記念して、10月に神河町で「歴史ウォーク」が同町主催で開催され、町内外から約150人が参加し、当時の馬車道とほぼ同じルート約6kmを歩いた。「銀の馬車道」は現代に例えると高速道路のような役割をはたしており、日本で一番初めに舗装という概念をもって作られたという。ホームページで歴史ウォークのポスターを確認すると、馬車道の周りには神社や地蔵、馬車がおおる橋、史跡など見るべきものがたくさんあり、景色の変化を楽しみながら歴史を感じることができることがわかる。昔の高速産業道である「銀の馬車道」と現在の車で通る高速道路と比較してみると面白いかもしれない。

### (3) 新潟歴史ウォーク

朝日新聞 2017年10月31日記事によると、2019年の新潟港開港150周年に向け、市内の湊まちを散策する「湊まち新潟歴史ウォーク」が10月に新潟市中央区で行われた。親子連れなど約60人が参加し、歴史ある沼垂地区の名所を歩き、新潟シティガイドのスタッフの解説を受けながら、沼垂定住三百年記念の碑や社寺を巡った。地元の酒蔵今代司酒造も訪れ、

酒蔵の中を見学したり、日本酒の試飲も行なわれた。新潟歴史ウォークでは、歴史を生かしながら日本酒を宣伝することにより、地域でさかんな特産物をPR使用としている。

#### (4) 松代ウォーク

信州・松代観光情報ホームページ「第14回 信州・松代ウォーキング エコール・ド・まつしろ 2017 春まつり」によると、2004年のエコール・ド・まつしろ以来、松代周辺を会場に毎年春に開催されている信州・松代ウォーキングがある。「松代出身の幕末の偉人、鎌原桐山、佐久間象山、山寺常山という“松代三山”にまつわる地を中心に、昨年のドラマの記憶も新しい真田家ゆかりの文化財を巡ります。武家屋敷や古刹の残る街並み、花咲き誇る田園風景と共に、春の松代をお楽しみください。」とあり、田園風景とともに歴史を楽しむウォークであることがわかる。13km コースと 8km コースの 2 コースあり、比較的大規模な活動となっている。

笹本(2004)は、2002年に松代で行なわれた「真田の歴史を活かした街づくり」と題した講演録の中で、住んでいる住民が心から誇りを持ってない場所に観光客は訪れないと述べている。そして、過去の文化のうえに生きている我々はよその地域の文化を見たくなるものとしたうえで、歴史のある地域に住む人たちがその文化の意味を知り、価値あるものと認識し、口コミで伝えていくことで、観光の芽となる旨を指摘している。そして、松代では、歴史を紹介するボランティア活動が盛んであること、ふるさとに自信を持っている人が多いと述べている。住民自身が地域を案内することで、自分の住む場所の歴史を知り、地元に対する自信と地元を愛する気持ちを強める活動につながり、観光に訪れる人には地元の良さを伝えることができる。住民自身が町の歴史を知ることで町づくりに反映できる。そしてイベントなどを増やすことで訪れる人が増え、地域活性化につながると考えられる。

#### (5) 小括

以上の 4 つのウォークの事例から、歴史の雰囲気を感じ取ることができるイベントとなっている。また、ガイドの詳しい解説もあり、訪れた人は地域の歴史や特産物を知ることができる。住民自身が案内をすることで、地域の魅力を発見する機会にもなることが分かった。

### 3. 加古川西部地域「水と緑のウォーキング回廊」における歴史的文化財

以下においては、加古川西部地域でこれまでバラバラに紹介されてきたり、あまり紹介されておらず、今回のフィールドワークで見いだした史跡や寺社仏閣などの歴史的文化財について、地区ごとに整理した。その際、さまざまな資料や聞き取り調査によって得た情報を組み入れた。

#### (1) 東神吉町天下原地区

##### ①大歳神社(天下原の毘沙門さん)

加古川ウエルネスパークの北に位置する大歳神社は、天下原の毘沙門さんの愛称で呼ばれている。天下原町内会長の田中一成氏によると、建立は1846(弘化3)年と言われ、黒岩

山の岩肌に彫刻された摩崖仏の毘沙門天が本尊として祀られている。本尊が摩崖仏の毘沙門天というのは日本に3社しかないとのことであるが、詳細は不明であり、さらなる調査が必要である。『日本大百科全書』によると、毘沙門天は日本では武将から信仰され、民間では福德を授ける神として信仰された。

天下原の毘沙門さんでは、春には花見ができ、秋には紅葉を見ることができる。

## ②こけ地蔵

天下原の東にあるこけ地蔵は、陰陽師で有名な芦屋道満ゆかりの地蔵である。この石仏は何度起こしても前に倒れるため、こけ地蔵と呼ばれるようになった。天下原町内会長田中一成氏が収集した資料によると、道満は京に修行に行ったが、ある人物の依頼で藤原道長を呪い殺そうとした。しかし、この罪が明るみにでてしまい京を追われてしまった。しかし、京への思いを断ち切れず、石の地蔵を背負って京を目指したが地蔵が駄々をこねてこれ以上進めないと行ってこけたため、この場所に降りし日本各地へ旅立った。他にも芦屋道満の式神が地蔵に体当たりしたので、何度起こしても前に少し倒れたという逸話がある。また、田中氏によると、この地蔵をモチーフにした紙芝居を制作中だという。

## ③兵庫県指定文化財本岡家住宅

案内板および本岡家パンフレットによると、少年自然の家にあるこの建物は、1694（元禄7）年に建てられた兵庫県で2番目に古い建物である。江戸時代の大型民家の基準建築として、1969（昭和44）年に「兵庫県指定有形文化財・本岡家住宅」として指定された。1994年まで八幡町下村に建っていたが、1995年に家主であった本岡篤信氏により市に寄贈され、1998年に元禄時代の姿に移築復元した。兵庫県には「千年家」と言われている箱木家があるが、建築年代の明らかな民家としては、この本岡家住宅が最も古く、江戸時代初期の建築形式を知ることができる。県内のみならず、西日本における重要な建築文化財であるといわれている。建築様式を見るためにプロの建築家が見学に来るとのことである。建築好きには必見の建物であるといえよう。

## ④水防飛来船

案内板および本岡家パンフレットによると、本岡家住宅の横に展示されている水防飛来船は、平荘町池尻消防ポンプ室に保管され、水防用として活躍していた。一級河川加古川の水位が堤防下まで来ると池尻町内県道沿いの住宅は浸水を繰り返し、この船「飛来船」が救助活動に当たっていた。最後の出動は1945（昭和20）年であったとのことである。

## ⑤明圓寺五輪塔

天下原の北に位置する明圓寺には、古い五輪塔がある。案内板によると、凝灰岩（竜山石）製で、火輪のみ花崗岩でできている。地輪に1342（暦応4）年とも読める銘があることから、南北朝時代に造られたものであるといわれている。

## (2) 東神吉町神吉地区の神吉山

### ①日露戦役記念碑

『かんきの要覧』によると、東神吉町神吉地区の神吉連山の北山頂上に、日露戦役記念碑

が建てられている。この碑には、東神吉・西神吉で西南戦役・日清戦役・日露戦役・日中戦役で戦没した人や日露戦役に従事した人の名前が刻まれている。戦没者のために 1906（明治 39）年に招魂祭が行われた。

#### ②中山記念碑

東神吉町神吉山の中山山頂にある。『かんき要覧』によると、神吉山は明治維新の時、官有地であったが、1877（明治 10）年、他県在住者に払い下げとなってしまった。1887（明治 20）年に神吉村民の寄付により買い戻し、村の土地となったことを記念して、後世に残すために碑を建てたとのことである。

#### ③四国播磨三十三カ所観音像

神吉山の北山と中山には、四国播磨三十三カ所観音像が並ぶ。その 18 番目には、後で紹介する常楽寺の文字が刻まれている。『かんきの要覧』によると、神吉城主神吉重員（初代神吉城城主元盛の先祖）が山名宗全との合戦で討ち死にしたので、重員の子彦次郎治邦が城主になった時、神吉一族のため、中山の中腹に四国三十三カ所観世音を設けて冥福を祈願した。「三十三」とは、観音菩薩が命あるものすべてを救うときに 33 の姿に変化するところからきている。

#### ④行者菩薩（行者山）

行者山には行者菩薩像がある。『かんきの要覧』によると、行者山の峰に役の行者を供養して、石造を有志が建てたが、明治に大破して基礎のみ残った状態であったので、1933（昭和 8）年に神吉庄吉が主催となり、神吉村有志が、行者菩薩及び、不動明王の石像を建てたとのことである。

### (3) 東神吉町神吉地区

#### ①那須与一地蔵

県道 43 号線沿いに位置し、言われなければ素通りしてしまうようなところに、那須与一地蔵がある。案内板によると、由緒では、昔、須磨にある那須与一の墓に毎月 7 日、熱心にお参りしていた播磨のある人の夢枕に那須与一が現れ「汝、我を信じて遠い所からこの地に参詣してくれているが、我が病気に掛かっていたおり、播磨国神吉ノ庄、<sup>たかの</sup>高野山慶妙寺に参籠していたが遂に落命せり。神吉村の西にある釈迦堂という所で火葬されたが、そこに有る半折れ（頭がない）の石仏は我の像なり。これよりはそこに参詣すべし。」とのお告げがあった。翌日、その場所を訪ねてみたところ、夢のとおり半折れの石仏があったので大喜びしたという。遠近の者はそのことを伝え聞き、毎月 7 日には多くの人々がこの石物にお参りするようになったという。この石仏にお参りすると、「長患いしなくてもすむ」といわれており、明治時代から毎月 7 日に地蔵講が行われ、人々が参詣に訪れる。8 月 27 日に地蔵盆があり、子供たちにお菓子が配られる。正月に餅つきが行われ、1 月 7 日に紅白のお餅が配られる。

#### ②常楽寺（旧神吉城）

神吉には、かつて神吉城があった。河岸段丘の段丘崖の斜面が防御に利用されたとみら

れる。矢嶋・神戸学院大学人文学部人文学科現代社会領域 2015 年度現代社会専攻演習Ⅲ（矢嶋ゼミ）履修生（2016）によると、常楽寺の境内が城の本丸にあたとみられている。本丸は四方を内堀でめぐらされており、その北に二の丸、東に東の丸、西に西の丸、それらの外周が堀でめぐらされていたと推定されている。豊臣秀吉が京を出発した信長の嫡子信忠の軍に合流して、信長の指揮の下に入り、三木城、神吉城、志方城を攻めた。1578（天正 6）年、志方城落城に先立って、約 20 日の攻防の末、落城された。当時、神吉頼定が当主を務めていた。

### ③四部延命地藏尊地藏堂

神吉地区の南側にある神吉公民館の向かいに位置している。この御堂の由来は不明であるが、案内看板によると、江戸時代初期のものといわれている。その頃流行り病のため多くの人が亡くなったことがあり、近くの者は「地藏菩薩の御堂がないから祟った」として相談し、この御堂を造ったといわれている。1974（昭和 49）年に御堂の大修理を行い、現在に至っている。また、棺の内側に地藏を彫っている石棺仏の一つで、南北朝時代か室町時代のものと考えられている。祠はお大師様をお祀りし、約 50 軒の人が交代で毎月 21 日に花やお膳をお供えしている。また 8 月 23、24 日には地藏盆を行っている。

### (4) 西神吉町宮前地区

#### ①宮前地藏堂の石棺仏と石棺

宮前会館から少し離れたところにひっそりと佇んでいる。案内板によると、石棺仏は、古墳時代中後期の 5～7 世紀の家形石棺の内側に彫られ、14 世紀頃の南北朝時代のものである。舟形光背を表現した削り抜き部の中で蓮華座上に座す通肩の衲衣をした阿弥陀如来を彫り出したものであるとされる。石板は、古墳時代の組み合わせ式石棺の底石の部材とのことである。

#### ②神吉八幡神社

宮山の入り口付近に建っている。加古川市史によると、参拝すると御朱印をもらうことができる。1575（天正 3）年、神吉城最後の城主である神吉頼定が寄進した石灯籠が現存する。厄災除け、子宝・安産、地域安全のご利益がある。『加古川市の民俗』によると、神吉八幡神社には、1820（文政 3）年の奥書をもつ絵巻物がある。この絵巻には、祭礼行列の様子が描かれており、かつての祭礼を知るうえで貴重な資料となっている。矢嶋ゼミの 2015 年度夏合宿調査報告書によると、毎年 10 月第 3 週目の日曜日に秋祭りが行われている

#### ③宮前宮山古墳群

宮前に位置する宮山古墳群には 3 基の古墳があり、それぞれ 1 号から 3 号の名称がつけられている。案内板によると、1・3 号古墳は、直径 15m の円墳であるが、その外形から弥生時代後期に造られた墳丘墓の可能性があるとのことである。2 号古墳は前方後円墳であり、全長 53m、後円部径 26m、前方部の長さ 27m の規模で造られている。古墳の形をみると、後円部が際立って高く、墳丘には川原石が散乱し、一部石列が露出している。これらの状況から、2 号古墳は、古墳時代前期（4 世紀）の古墳ではないかと考えられている。宮前古墳



群は、加古川西岸の古墳時代を考えるうえで貴重な古墳群とのことである。

#### (5) 西神吉町鼎富木地区

##### ① 観音堂

西神吉町鼎富木地区の蓮池のそばに位置している。『富木の歴史資料集め帳 2003. 9. 15～』によると、この観音堂には次の由緒がある。数百年前に大和国の露岡寺<sup>(注)</sup>から金の観音像を勧請されたが、1445(文安2)年に観音像を奪われたため石の観音を刻み祭った。1892(明治25)年頃に大旱魃があり、鶴巢池(現在の蓮池)が干上がったときに、池の底からお地藏さんが現れたので、きれいに洗ってお祭りしたら雨が降ったという逸話がある。観音堂の砂はマムシよけとして伝わっている。現在では7月と8月に祭りがおこなわれている。

##### ② 南宗寺

西神吉町鼎富木地区の集落内にある。南宗寺ホームページによると、約500年前からあるお寺であり、当時は藁葺の小さな建物であったが、約200年前に本堂が再建されて現在に至る。二河白道の庭という中国の善導大師の書かれた「観経疏」という書物に出てくる喩えをテーマに造られた庭がある。

##### ③ 靴下直売所

富木地区には、靴下専門の直売を行う(株)トミキが位置する。紳士・婦人・通学用の靴下や、シルク製、5本指の靴下の販売を行っている。

『加古川市史第2巻』によると、江戸時代の加古川付近は、播磨の国における木綿の名産地とされていた。しかし、欧米諸国と「安政の五か国条約」が締結され、貿易が始められたことにより、大量の輸入綿花と綿製品が輸入されるようになり、日本の綿栽培は打撃を受けた。綿作が衰退したのは明治20年代で、輸入品の綿が世に出回って、経済が厳しくなると綿農家は減少した。そうした中で、「二毛作」を行うことによって生計が立て直され、農家の間では綿農業は副業という形で復活した。『Kako-style2(かこ・スタイル2)』によると明治初年に、西神吉町の北隣の志方町の住民が上海から手回しの靴下編立機を持ち帰ったことがきっかけで靴下産業が発展し、根付いていった。兵庫県靴下工業組合ホームページによると、加古川市の靴下産業は、靴下生産の全国三大産地の一つとされる兵庫県のなかで、生産量の約半分をしめている。しかし、『Kako-Style2』によると、平成に入って中国から安い輸入製品の急増やデフレ傾向の経済情勢などの煽りを受け、1991年をピークに衰退している。

経済産業省ホームページ「ふるさと応援宣言」によると、現在加古川では、「かこがわコットンプロジェクト」として無農薬栽培の綿花から地域ブランドの靴下を作る取り組みが行なわれていて、綿花栽培から靴下製作まで一貫して行うパーフェクト・メイド・イン・加古川の靴下を目指している。靴下のほかに、かこっとんペーパーやかこっとん綿実油などを市内の関係事業者と協力し製造・販売を行うことで、かこっとんやそれらを用いた製品のブランド化を図ろうとしている。かこがわコットンプロジェクトにおける商品化の第一弾として、化学染料を一切使用していない加古川産綿花100%の靴下が作られ、JR加古川駅前に

ある靴下のアンテナショップ「かこがわ工房 Kips」などで販売されている。

関連して、JR 加古川駅の中央コンコースに、「まち案内所」と「かこがわ観光物産館」があり、地酒、お菓子、靴下などの加古川の産品を展示紹介している。展示品の販売は行っていないが、電車の待ち時間などに訪れると、加古川発祥の「かつめし」、靴下産業の歴史、ふぁ～みんショップの米粉など、加古川の物産や文化を知ることができる。

#### (6) 加古川ウエルネスパークの発信力

加古川ウエルネスパークの発信力の活用も必要である。加古川ウエルネスパークでは、神吉山にある史跡を利用したハイキングを、2017 年春にはウエルネスパーク主催、秋は加古川市役所健康課と共に実施した。大人から子どもまで楽しめる内容となっていたとされる。

### 4. 歴史を活かしたマップ作成にあたって

歴史班が担当したマップは「歩いて見つける歴史編」である。ウォーキングマップを作成するにあたって気をつけた点は2つある。

1 点目は、史跡の数が多き地区もあれば、数が少ない地区もあつたことから、バランスよく史跡を選択する必要があつたため、全ての史跡を載せることができなかつた。そのためどのように史跡を選択するかが鍵となつた。

2 点目は、足を向けたくなる写真の選択と説明の作成である。その史跡にとってベストな角度か見栄えの良い写真であるかどうか判断する必要があつた。写真だけではなく、説明文にも注意した。史跡の掲載が資料によってまちまちで、広く情報収集する必要があつた。案内看板にしか説明がない場合もあり、有効活用した。また、限られた文字数で伝えることの困難さがあつた。特に案内看板に書かれていることは、専門的な内容が多く、事実を追うだけで、手一杯だつた。

以上のことに配慮して作成したウォーキングマップを使った歴史ウォークでは、次のような可能性があると思ふことができる。多くの史跡の存在をあらかじめ認識した状態でめぐることができるので、まるで探検するかのような臨場感で歴史を感じることができる。また既存のマップに載っていない史跡をみつけることで、ウォーキングを行う人達の冒険心を盛り上げるにつながると考えられる。史跡ごとに詳しい説明の看板が提示されていることも多い。案内板を参考にするとよいだろう。

### 5. おわりに

本研究は、加古川市西部地域において、ため池や里山を生かした水と緑のウォーキング回廊構想の実現を目指して作成した、歴史史跡ウォークに適したウォーキングマップを活用して、東神吉町・西神吉町の史跡や寺社仏閣をめぐるウォーキングを行うことで、ウォーキングを訪れた人がこの地域の史跡や寺社仏閣を知る機会ができ、また、この地域においても住民自身が史跡を活用した「歴史ウォーク」を企画することが可能になるのではないかと考え、歴史ウォークを行なう意義について考えたうえで、地域にある史跡や寺社仏閣、地場産

業を整理し、ウォーキングマップに活かしていくことを目的とした。

2 節では、歴史の雰囲気を感じ取ることができる4つのウォークの事例から、ガイドの説明により、訪れた人が地域の歴史や特産物を知ることができ、住民自身が案内をすることで、地域の魅力を発見する機会にもなることがわかった。

3 節では、今回の研究対象地域の史跡や寺社仏閣、地場産業を、できる限り、しかし地域的にバランスよく取りあげた。

このウォーキングマップは地域外から人を集めるためだけのものではない。地域住民がウォーキングマップを手にして、関心を持って地域を散策するようになれば、地域住民自身に新たな発見をもたらす可能性がある。歴史ウォークを行うことにより、地元のベテランに地域の歴史を教えてもらう機会ができれば、交流もできる。また親子で参加することで、コミュニケーションがとれる。

広く加古川市の住民に、加古川市西部地域の史跡や歴史について興味を持ってもらうことも必要である。加古川ウェルネスパークが持つ情報発信力をうまく活用したい。

以上のようにウォーキングマップ作成を行ったが、この地域の史跡・寺社仏閣は、この報告書、ウォーキングマップに掲載されるだけではない。多くの史跡の横には、詳細な案内板が設置されていることから、ぜひマップを見ながらあちこちへと歩いてほしい。

#### (注)

西国三十三所観音霊場第7番岡寺の御詠歌に「今朝見れば露岡寺の庭の苔更乍ら瑠璃の先り也りけり」とあり、「露岡寺」とは岡寺のことと思われる（小関1887）。このことは地域においても認識されているようであり、『富木の歴史資料集め帳』にも記載があった。

#### <参考文献・ホームページ>

小栗俊之（2007）「実体験を重視した野外教育プログラムに関する研究—東海道五十三次ウォーク 2008 の教育計画および実地踏査—」文京学院大学人間学部研究紀要 9-1、pp. 317-335

加古川市教育委員会編集発行（1985）『加古川の民俗』

加古川市史編さん専門委員編（1994）『加古川市史第1巻』兵庫県加古川市

Kako-Style 編集委員会編集発行（2015）『Kako-Style2』シミズシーズ

神吉町内会編集発行（2011）『かんきの要覧』

神戸新聞社編（2012）『ひょうご社寺巡礼2』神戸新聞総合出版センター

小関泰法（1887）『西国三十三所御詠歌仮名 乾其中篁（国立国会図書館デジタルコレクション）』

笹本正治（2004）『地域おこしと文化財』ほおづき書房

矢嶋 巖・神戸学院大学人文学部人文学科現代社会領域 2015 年度現代社会専攻演習Ⅲ（矢嶋ゼミ）履修生（2016）「都市近郊農村のより良い生活環境を目指して—加古川西部地域に

おける宝物の発見―」神戸学院大学地域研究センター編『都市郊外地域における大学と地域との協働に関する研究 研究成果報告書〈地域研究センター都市郊外班〉』神戸学院大学地域研究センター， pp. 1-56」

『富木の歴史資料集め帳 2003. 9. 15～』

朝日新聞 2004年4月30日長野版記事「松代のもてなし（信州城めぐり 薫風に誘われて：1）」

朝日新聞 2017年10月29日兵庫県版記事「雨の馬車道、歴史思う 神河、150人ウォーク」

朝日新聞 2017年10月31日新潟県版記事「沼垂で名所巡り、親子連れら60人新潟歴史ウォーク」

エコール・ド・まつしろホームページ <http://matsushiro-club.ciao.jp/matsushiro-club/>  
(2018年1月24日閲覧)

経済産業省ホームページ『ふるさと名物応援宣言』

<http://www.chusho.meti.go.jp/shogyo/chiiki/2016/160129hurusato.htm>

信州・松代観光情報ホームページ「第14回信州・松代ウォーキング エコール・ド・まつしろ 2017 春まつり」 [http://www.matsushiro-year.jp/modules/eventguide/index.php?action=EventView&event\\_id=140](http://www.matsushiro-year.jp/modules/eventguide/index.php?action=EventView&event_id=140) (2018年1月24日閲覧)

南宗寺ホームページ <http://www.bb.banban.jp/nansyuji/nansyuji.htm> (2018年2月9日閲覧)

兵庫県靴下工業組合ホームページ <http://hyogosocks.or.jp/?p=132> (2018年2月9日閲覧)

## V 加古川市西部地域における水と緑のウォーキング回廊のためのインフラ・商業施設とマップへの反映

インフラ・商業施設班

池澤尚人 長手優子 西嶋郁哉 藤川拓哉

### 1. はじめに

日本の地方都市では、1960年代以降進んだ自動車社会化や近年の少子高齢化の進展の影響を受けて、バス路線の運行本数の減少や廃止が進み、公共交通がなくなっている。一方、1970年ごろから郊外の幹線道路沿いを中心に急増し、敷地が広大で店舗の面積が大きく、大規模な駐車場を集客装置として構えたロードサイド型店舗が、現在の地方圏の人々の買い物先の中心となっているとされる。こうしたロードサイド型店舗が発展することによって、地方都市の中心市街地の商店街が衰退し、農村に昔からある店も減少してきているとみられる。

公共交通機関が廃止された地域では、交通が不便になり子どもの通学に適さなくなることで、そこに住みたいと思う人が減っていくことだろう。こうした地域では、移住してくる人も少なくなり、住民はさらに減少していくものと思われる。

神戸学院大学人文学部地域社会領域3回生矢嶋ゼミでは、2017年9月8日～10日の3日間、加古川市西部地域を対象として、里山とため池をつなぐ水と緑のウォーキング回廊の構想を実現するためフィールドワークを行った。地域にある自然、農業景観、歴史などの魅力を見出し、それらを織り込んだウォーキングマップを作成することになった。

それにあたり、この地域でハイキングやウォーキングをする人が安心安全かつ楽しく過ごせるようにしていくため、ハイキングやウォーキングのインフラについて調べることとなった。ウォーキング回廊を設定するためには、この地域に訪れた人がハイキングやウォーキングをする際に、飲食やお土産などの買い物ができるのかといったことや、どこのバス会社の路線がどこを通り、バスの時刻やバス停の場所といった情報が必要となる。また、車で訪れる人が少なくないと考えられることから、駐車場に関する情報も重要となる。

しかし、地方都市加古川の都市近郊農村地域である加古川市西部地域では、公共交通機関の縮小が進んできている。主要道路沿いにはロードサイド型店舗が多数立地し、一方で小規模な商店の廃業も進んでいる。そのため、ロード型サイド店舗をハイキング、ウォーキングのインフラとして位置づける必要がある。

インフラ・商業施設班では、ハイカーが訪れる地域側の活性化を念頭に置き、飲食店や土産となり得るものを購入可能な商業施設、ハイキングのためのインフラとなりうる設備を実地調査して紹介することとなった。店舗では、ウォーキングマップへの掲載許可の交渉を行い、その情報を反映させた。

そのためにも、過疎化と自動車社会化の進展により日本の地方都市における交通と商業がどのように変化したかを理解し、そのうえで、加古川西部地域における人口と交通、商業

の変化について検討し、現状を認識することとなった。

研究は以下の通りに進めた。2 節ではハイキングのインフラとは何かについて考えたうえで、兵庫県豊岡市と養父市を対象地域とした研究から、地方都市における自動車社会化と少子高齢化による公共交通機関の衰退について考える。3 節では、研究対象地域である加古川市西部地域における人口と商業、公共バス路線の変化について、統計やフィールドワークで得られた情報をもとに把握する。4 節では、ウォーキングマップ作成にあたってマップに掲載する情報の作成方法と注意点について述べる。以上をふまえて、5 節では、作成したウォーキングマップの活用への期待と、研究からみえてくる本地域の課題について考える。

## 2. ハイキングにおけるインフラとしての公共交通と買い物環境の変化

### (1) ハイキングのインフラとは

『最新地理学用語辞典』によると、「インフラとは、インフラストラクチャー (infrastructure) 「下部構造」と訳されることもある。より広義には、交通、通信、上下水道、各種エネルギー施設、文教・福祉・医療諸施設を指し、「生活上必需となる建造環境」にあたる。

今回のウォーキングマップ作成におけるハイキングのインフラには、公共施設、商業施設、飲食店、バス路線とバス停、公衆トイレ、駐車場などが挙げられる。これらの施設は、おもに地域住民が利用することを念頭において立地したものと考えられるが、ハイキングやウォーキングにも利用可能である。

### (2) 地方圏における公共交通

地方圏では、自家用車の利用が増え、公共交通機関の利用は低下していると考えられる。地方圏における地域公共交通は、利用者が減少することにより、交通事業者の経営状態が圧迫され、赤字路線を廃止せざるを得ないなど、維持が困難な状況にある。地域公共交通はますます衰退し、危機的な状況にある。

日本では、1960 年代に過疎化が始まり、2000 年代に入り少子高齢化という問題が起きてきた。それに加え 1960 年代には自動車社会化も進み、その影響で特に地方において、バス路線廃止や運行本数の減少などがおきた。これについて西澤 (2009) は、都市部において、地域コミュニティバスの設定や新たな鉄道新路線の建設が盛り上がりを見せている一方で、地方に目を向けると、公共交通機関は依然と厳しい状況であると述べている。

朝日新聞 2010 年 12 月 21 日記事によると、2002 年の道路運送法改正によって、バス事業者の路線廃止が許可制から届け出制になったことで、バス路線の廃止が加速した。これによって、地方では特に自家用車を持たない高齢者が買い物弱者となってしまっている。

西澤 (2009) によると、兵庫県北部の但馬地方では、おもに全但バスが公共交通を支えてきたが、赤字が続き、経営再建のため 2008 年に 22 路線を廃止した。兵庫県豊岡市では 11 路線が運行休止対象となり、全ての路線において自治体による代替バスが運行されている。高齢者の割合が高い地域ではデマンド輸送がされており、少しずつ本数の増便をするなど

改善しているが、自由が利かず利便性に欠けているほか、デマンド輸送の意味が地域住民にうまく伝わっていないという。これらの路線と共通する点としては、通学輸送が存在しないということ、バスの運行本数が著しく少ないということが挙げられる。

養父市では旧養父郡養父町域を走る高中線の 1 路線が休止対象となったが、それに替わる自治体の代替交通手段の設定がなされなかった。市側は、同じルートを経由する既存のコミュニティバス「わいわいバス」を代替手段に設定した。路線廃止以前から小学生はコミュニティバス、中学生はスクールバス、高校生は自転車か家族の送迎で通学していた。高齢者の輸送は、全但バス運行当時はバスが八鹿駅まで直通していたので八鹿病院などへの通院目的に高齢者にも利用されていたが、路線休止後は「わいわいバス」では旧養父町域外へのアクセスが悪いため、高齢者のバス輸送は旧養父町内のみのものに限られるようになった。

以上から、公共交通が廃止・縮小された地域では、利用者が少ない交通機関が廃止されたり、本数が減らされたりしたことにより、出かけたくても交通手段がない地域住民と、経済状況の厳しい交通事業者との間で負の連鎖が引き起こされている。また、高齢者にデマンド輸送などの意味がうまく伝わっていないことにより、利用することが困難な環境になっている場合もあることから、高齢者でも理解しやすい情報伝達をする必要がある。さらに、地域住民以外の方がデマンド輸送を利用できるのか、もし利用できるならばそれをどのように伝えていくかについて考える必要がある。近年自動車社会化が進む中で、車がないと生活しにくい世の中になってきていることがわかる。また、地域住民だけでなく他地域から来た人も自動車での移動を余儀なくされる。

## (2) 買い物環境の変化

自ら自動車を運転する高齢者の割合が多く、高齢者の交通事故が増加している。車を運転することができない高齢者や生活弱者は、日常生活において不便な思いをしていることが多く、買い物難民の増加、あるいはフードデザート問題として 2000 年ころから問題視されている。

森（2013）によれば、日本でのフードデザート問題の発生要因は、生鮮食料供給の崩壊と高齢者の増加の 2 つの要素が重なったこととされている。大型店の郊外立地によって、中心市街地では食料品店がなくなって買い物ができなくなり、長距離の移動を余儀なくされ、食料供給の崩壊状態となった。日本では、1974 年に大規模小売店舗法が施行されその後廃止され、その代わりとして、1998 年に大規模小売店舗立地法が施行されたが、用途規制は郊外ほど緩かったため、大型店の郊外化が急速に増え、中心商店街の空洞化を引き起こした。その対策として中心市街地活性化法が制定され、都市計画法が一部改正されたが、大型店の出店規制緩和のため、大型店の郊外出店は加速していったという。モータリゼーションの進展がそれを可能にした。1960 年代以降のモータリゼーションは、ロードサイド型店舗の増加にも影響を及ぼした。1970 年ごろから郊外の幹線道路沿いを中心に、敷地が広大で店舗の面積が大きく、大規模な駐車場を集客装置として構えたロードサイド型店舗が急増し、現在の地方圏の人々の買い物先の中心となっている。そうしたロードサイド型店舗が発展す

ることによって、地方都市の中心市街地の商店街や、農村に昔からある店がつぶれていくようになった。

まちづくりコーポレーションホームページによると、ロードサイド型店舗は主に郊外に立地し、自家用車やオートバイ、自転車などでの集客をメインとしている店舗を指す。高度経済成長期とともに自家用車を所有する家庭が増え、生活圏の範囲が広がったことにより、大型駐車場を構えたファミリーレストランや、ガソリンスタンド、ドライブインやスーパーマーケットが主要道路沿いに出店を始めたとされる。高度経済成長により大都市の中心部の地価が高騰して、居住地が郊外へと移っていき、同様に店舗も地価が高い中心部から郊外へと広がっていったことがロードサイド型店舗の発展のきっかけとされている。また、高度経済成長期以降自家用車が普及し、広い駐車場を持つロードサイド店舗を利用することが多くなったことも、ロードサイド型店舗が発展した理由の一つとしてあげられる。

### 3. 加古川市西部地域における人口と店舗と公共交通機関の現状

#### (1) 加古川西部地域における人口の変化

表1は加古川市統計書に掲載される町丁別住民基本台帳人口にもとづき、加古川市西部地区のうち、今回研究対象とした地区の2006、2011、2016年の世帯数、人口、年齢構造およびその割合について示している。これによると、神吉、天下原、宮前、鼎のそれぞれの地区では人口が減少してきていて、東神吉町、西神吉町それぞれの合計の人口も減少している。また、神吉、天下原、宮前、鼎地区では少子高齢化も進んでいて、とくに天下原地区は少子高齢化が急速に進んでいる。2006年において年少人口の割合は14.6%であったが、2016年には8.5%になっている。老年人口については、2006年では21.3%であったが、2016年にお

表1 加古川市東・西神吉町の世帯数、人口、年齢構造の推移

	世帯数	人口	年齢構造(人)			年齢構造割合		
			年少人口	生産年齢人口	老年人口	年少人口	生産年齢人口	老年人口
2006年								
加古川市	100,321	266,350	40,400	179,850	46,100	15.2%	67.5%	17.3%
東神吉町全体	5,285	14,816	2,049	9,785	2,982	13.8%	66.0%	20.1%
うち神吉	1,897	5,262	602	3,497	1,163	11.4%	66.5%	22.1%
うち天下原	414	1,106	161	709	236	14.6%	64.1%	21.3%
西神吉町全体	3,484	9,293	1,165	6,191	1,937	12.5%	66.6%	20.8%
うち宮前	282	793	60	563	170	7.6%	71.0%	21.4%
うち鼎	278	781	85	495	201	10.9%	63.4%	25.7%
2011年								
加古川市	107,439	269,087	39,329	174,115	55,643	14.6%	64.7%	20.7%
東神吉町全体	5,472	14,482	1,915	8,927	3,640	13.2%	61.6%	25.1%
うち神吉	1,930	5,047	560	3,025	1,462	11.1%	59.9%	29.0%
うち天下原	415	1,029	125	599	305	12.1%	58.2%	29.6%
西神吉町全体	3,576	9,009	1,130	5,543	2,336	12.5%	61.5%	25.9%
うち宮前	281	737	54	484	199	7.3%	65.7%	27.0%
うち鼎	271	732	75	436	221	10.2%	59.6%	30.2%
2016年								
加古川市	112,814	268,643	36,464	163,596	68,583	13.6%	60.9%	25.5%
東神吉町全体	5,650	14,067	1,702	8,038	4,357	12.1%	57.1%	31.0%
うち神吉	1,976	4,823	485	2,565	1,773	10.1%	53.2%	36.8%
うち天下原	386	858	73	450	335	8.5%	52.4%	39.0%
西神吉町全体	3,674	8,658	936	4,864	2,858	10.8%	56.2%	33.0%
うち宮前	277	678	45	361	272	6.6%	53.2%	40.1%
うち鼎	279	680	63	368	249	9.3%	54.1%	36.6%

注)割合においては、少数点第2位を四捨五入  
加古川市統計局「町長別住民基本台帳人口」より藤川作成



いては 39.0%となっている。

一方、西神吉町ではとくに宮前地区で少子高齢化が進んでいる。2006 年において年少人口の割合は 7.6%であったが、2016 年には 6.6%になっている。老年人口については、2006 年では 21.4%であったが、2016 年には 41.0%となっている。人口減少が進んでいる一方で、高齢化率が急速に高まっているのは、その地区の住民が歳を重ねたという理由もあるが、仕事で転勤などをしてきた人が定年になり、地元に戻ってきている人も少なからずいることによるとも考えることができる。加古川市全体や東神吉町、西神吉町それぞれの全体と比べてみてもわかるように、神吉、天下原、宮前、鼎の 4 地区では特に少子高齢化が進んでいる。今回取り上げた東神吉町、西神吉町は交通の便や買い物環境が決して良いとは言えないため、もし移住してきても子育てが難しいことは、生産年齢人口の割合が高まらないことの一因になっているかもしれない。

## (2) 東神吉町・西神吉町におけるハイキングのインフラとなりうる店舗の現状

加古川西部地域の東神吉町の場合、通行量の多い広い県道沿いに、写真 1 のマクドナルド、ファミリーマートの他、コープこうべ、ふあ～みん SHOP かんき店のような大きな駐車場を備えた店舗が多く並んでいて、写真 2 のように土曜日の 12 時頃にはたくさんの車が列を作っていた。自動車利用を前提にした商業施設が立地しやすい環境にあり、こうしたロードサイド型店舗が立ち並んでいる。このような店舗に行くには自家用車を所有していないと、高齢者や体の不自由な人が買い物に出ることは非常に困難である。



写真 1 ロードサイド型ファストフード店  
2017 年 7 月 16 日 秋元撮影



写真 2 ロードサイド型店舗のドライブスルーに並ぶ車  
2017 年 9 月 9 日 矢嶋撮影



写真 3 自動販売機のみで営業している店舗  
2017 年 9 月 8 日 神吉 S 班撮影

表2をみてのとおり、東神吉町と西神吉町の店の数を比べてみると、広いバイパス道路が通っている東神吉町の方が多くことがわかる。フィールドワークで現地を確認した結果、東神吉町では、写真3のような昔からある店がなくなり、広い道路沿いに写真1のような、ロードサイド型店舗が増えたとみられる。自動車社会化が進む中

で、駐車場がなく近くにバイパスもできて、主要道路沿いでなくなってしまった。写真3のような大型の駐車場を持たない小規模店舗は、バイパス沿いに増加したロードサイド型店舗の影響を受けた可能性がある。さらに、表1に示されるように、地域の人口が減少して客が減ったことも経営に影響を与えたと考えられる。

東神吉町神吉地区には、加古川市に合併された1956年まで、旧東神吉村役場があった。人口が多い集落で、昔からあると考えられる写真3のような店が、地区に位置していて、必要な店として住民たちに利用されていたと考えられる。こうした店が閉店している一方で、神吉地区にはいまでも営業を続ける個人店もいくつかあり、自動販売機も比較的多い。

なお、バイパスができることによって、閉店する店が現れることもある。写真4は集落から外れた県道の旧道にあるコンビニエンスストアとみられる空き店舗である。一方、旧道沿いにある飲食店の明日香神吉店の場合、主要道路との交差点に位置していて、どちらの道路からも駐車場に入れるという特徴があることも店が存続している理由の一つと思われる。

西神吉町の鼎富木地区、宮前地区は、農村地域で人口が少ないことから、商店や自販機はかなり少ない。現在営業している個人店も厳しい経営を迫られているとみられる。

また、加古川ウエルネスパークと加古川市立総合体育館には飲食店や軽食スナックがあり、食事をとることができる。また、訪れた人が休憩できるスペースもある。

なお、研究対象地域の店舗の中には、常連客を大事にしていることや午前中のみ営業という理由で、ウォーキングマップへの詳細な掲載を拒否する店もあった。

### (3) 東神吉町・西神吉町における交通機関について

表2 研究対象におけるハイキング・ウォーキングのインフラになりうる店舗の一覧

東神吉町 神吉・天下原	西神吉町 宮前・鼎富木
飲食店 7店	飲食店 3店
コンビニエンスストア 2店	小売店(靴下) 1店
小売店 1店 コープこうべ1店	
ファーストフード店 1店	
JAの農産物直売所 1店	
計 14店舗	計 4店舗

フィールドワークの情報を基に作成



写真4 県道から外れたところにある閉店したコンビニ

2017年6月11日 藤川撮影

研究対象地域の交通機関について、神姫バスの加古川駅～ウエルネスパーク間の平日時刻表は、2018年2月時点で、8時台から18時台まで約3時間おきに4本運行しており、土・日・祝日は9時台と12時台、17時台の3本となっている。

ウエルネスパークには、第1～第4駐車場の計274台、図書館駐車場40台の、合わせて314台の駐車が可能であるため、ウエルネスパーク付近でハイキングやウォーキングをする際は、自家用車の利用は不可能ではない。ただし、ウエルネスパークの駐車場は利用率が高く、平日も車が多く、休日はさらに混雑が予想される。

一方、西神吉町を通る神姫バス宝殿駅北口～細工所北口間の本数は、2018年2月時点で平日7時台から19時台までの1～3時間おきに7本あり、土・日・祝日も8時台から19時台まで約2時間おきに6本運行している。加古川市立総合体育館に約500台、加古川運動公園陸上競技場には300台の駐車場がある。自家用車を置くスペースもあるため、交通機関を利用する際にはあまり困ることはないと考えられる。

なお、矢嶋・神戸学院大学人文学部人文学科人間環境コース2011年度年環境学演習Ⅲ（矢嶋ゼミ）履修生（2012）によれば、2011年11月時点では、西脇～宝殿駅・加古川駅間で平日6時台から19時台まで13本あったが、2018年2月現在、西神吉町西脇バス停のバスの本数は平日6時台から19時台まで9本、土・日・祝日も7時台から18時台まで6本となっており、バスの運行本数が減らされたことがわかる。また、2011年11月時点のバス運行系図に載っているバス路線には、2018年2月現在では廃止されているものもあり、この地域でもバス路線が削減されてきたことがわかる。なお、加古川市が運営するデマンドバスは研究対象地域を通過していない。

#### 4. インフラ・商業施設のマップを作成するにあたっての注意点

地図とインターネットだけで調べてマップを作成するのは簡単だが、真の姿を確認するために、実際に行ってみて、自分たちの目で確認をし、自分たちの足で歩いて確認した。担当部分は、「もぐもぐてくてく編」の買い物や飲食ができるポイントと、3種のマップに共通して掲載した、トイレ、飲食店、物販店、自動販売機、休憩所、バス停、駐車場のインフラの位置情報である。

マップにおける紹介文の作成においては、店の個性を崩さないように、自分たちが直接店の人から聞いた話をもとに工夫した。文章はあまり畏まらずに柔らかく、しかし失礼のないように、たくさんの方が寄ってくれそうな言葉を選んで推敲した。

掲載するにあたり、店の人に許可を取る必要があるため、一言申し出た。また、紹介に使用する写真は一般客の人が映らないように配慮をした上で、現物をわかりやすく、綺麗に撮るように構図などを工夫した。

店や自動販売機、バス停、休憩所、駐車場など、種類別に記号をつくり、地図にマークするように心掛けた。

## 5. おわりに

本研究では、加古川市西部地域を対象として、里山とため池をつなぐ水と緑のウォーキング回廊を構想するにあたって、インフラ・商業施設班では、ハイキングやウォーキングをする人が安心安全かつ楽しく過ごせるようにしていくため、ハイカーが訪れる地域側の活性化を念頭に置き、飲食店や土産となり得るものを購入可能な商業施設、ハイキングのためのインフラとなりうる設備を、実地調査にもとづいて紹介することとなった。そのため、過疎化と自動車社会化の進展により日本の地方都市における交通と商業がどのように変化したかを理解したうえで、地方都市の都市近郊農村地域である加古川西部地域における人口と交通、商業の変化について検討し、現状を認識することとなった。

日本の地方都市では、自動車社会化が進んでおり、その影響でバスの廃止や本数の減少など、公共交通機関の縮小が進んでいる。本研究の対象地域においても同じような傾向がみられた。バス路線が縮小され運行本数が少なくなっている上に、古くからの集落では、近所で買い物ができる店が少なくなり、交通手段が限られている人たちが買い物難民になりうる。

研究を通して明らかになったこの地域の課題は次のとおりである。まず、加古川市西部地域の住民については、自家用車を運転できない場合には買い物難民状態となっている人が生じている可能性がある。コープこうべの宅配サービスなどもあるが、限界があると考えられる。そのため地方自治体が高齢者の買い物にどのように対応していくのかが課題である。今後研究対象地域では、地方自治体が人口減少を少しでも抑えていく対策を講じていかなければいけない。

また、地域外から自動車でハイキングやウォーキングをしに訪れる人に対しては、公共施設の駐車場の利用で対応できると見られる一方で、バスを利用して訪れる人のために、分かりやすい最新のバス路線網や停留所の時刻表情報を載せたパンフレットの作成と配布、そしてダイヤ改正ごとの更新が求められる。今回のマップは、試行的に作成されたために更新できないことや、紙面の都合もあり、バスの情報についての記載は最小限にせざるを得なかった。利用者は神姫バスのホームページの運賃・時刻表検索で確認してほしい。

ウォーキングマップを完成させることで、加古川市西部地域について他地域の人に広く知ってもらい、足を運んでもらうとともに、地域住民にも、このマップで地域の魅力を再発見してもらうことで、地域住民のまちづくりの意欲が高まり、少しでも地域の活性化につながっていくことを期待する。

### <参考文献・ホームページ>

- 西澤 渉 (2009)「過疎地域における民営バス路線休止への対応の現状と課題-兵庫但馬地域を事例として-」兵庫地理 54、pp. 37-47
- 森 隆行 (2013)「日本における買い物難民問題とサプライチェーン」流通科学大学論集流通・経営編 26-1、pp. 103-116
- 矢嶋 巖・神戸学院大学人文学部人文学科人間環境コース 2011 年度人間環境演習Ⅲ (矢嶋

ゼミ) 履修生 (2012) 「都市近郊の王損のよりよい生活環境を目指して一兵庫県加古川市西神吉町を事例として」 神戸学院大学地域研究センター明石グループ編『平成 23 年度研究成果報告書<地域研究センター明石グループ>』神戸学院大学地域研究センター、pp. 33-64

朝日新聞 2010 年 12 月 21 日記事「広がる「デマンド型」交通弱者、どう支える/宮城県」

<http://database.asahi.com/library2/main/top.php> (2018 年 1 月 24 日閲覧)

国土交通省近畿運輸局 (2012) 「地域公共交通確保」 (2017 年 12 月 5 日閲覧)

<http://www.tb.mlit.go.jp/kinki/kansai/program/02.pdf>

神姫バスホームページ <https://navi.shinkibus.jp/snk/> (2018 年 2 月 22 日閲覧)

B リーグチャンネル <https://bleague-channel.com/kakogawa/> (2018 年 2 月 22 日閲覧)

まちづくりコーポレーションホームページ「ロードサイド店舗の特徴と発展」

<http://www.machi-corp.jp/column/232> (2018 年 1 月 31 日閲覧)

見に来てや! 東はりま「加古川運動公園」 (2018 年 2 月 22 日閲覧)

[http://www.e-harima-tourism.jp/spot/category\\_22/item\\_52.html](http://www.e-harima-tourism.jp/spot/category_22/item_52.html)

## VI 加古川市西部地域における Kids のための水と緑のウォーキング回廊マップの検討

kids 班

竹田和真・秋元崇志・北垣七海

### 1. はじめに

日本学術会議提言「学校教育を中心とした環境教育の充実に向けて」によると、子どもの自然離れが進んでおり、基礎体力も低下している。幼児期に走り回る機会が少なくなったこと、テレビゲームや携帯電話の普及などにより子どもが外に出なくなったことがその要因として考えられる。自然体験は、自然の中で遊び、楽しみながら感性を養うことができ、体力、知力をつけることができる。自然体験は人間としての成長過程に不可欠であると同時に、それを通して子どもは、人と自然の関係について包括的に学び、人間を含めた環境全体、地球の営みなどについて基本的な認識を養うことができるとされている。

ここで、自然体験に関連して、自然について定義しておく。『新明解国語辞典 第五版』によると、自然とは、山川、草木動物などとされる。子どもが自然体験活動をするうえで、子どもだからこそ、自然と触れ合い、得られるものは多くあると考える。子どもの視点から見える景色は、子どもにしかわからない。子どもは山川、草木、動物などと直接触れ合うという自然体験を通して興味、関心を促し、疑問や想像力を働かせて、創造性を発揮していく。自然は、子どもの成長にとって有意義に働くものと言えよう。自然の中で本来人間の持っている五感が研ぎ澄まされ、好奇心が育まれることにより、子どもにとって大きな成長、発達につながると考えられる。こうした自然を体験することによって、自然への感受性が育まれていくのではないだろうか。

神戸学院大学人文学部 2017 年度 3 回生矢嶋ゼミでは、2017 年 9 月 8 日～10 日の 3 日間、加古川市西部地域を対象として、里山とため池をつなぐ水と緑のウォーキング回廊の構想を実現するためフィールドワークを行った。そのため、地域にある自然、農業景観、歴史などの魅力を見出し、それらを織り込んだウォーキングマップを作成することになった。

加古川市ホームページ「加古川市の学校・幼稚園」にもとづき、今回、調査対象地域の小学校である加古川市立西神吉小学校、東神吉小学校における自然体験実施状況について確認した。農地においては、東神吉小学校 3 年生が 4 月に里芋植えを行ったり、東神吉幼稚園の児童が 5 月に苺の収穫を行ったり、西神吉幼稚園の児童が 6 月にさつまいもの苗植えやじゃがいもの収穫を行ったりしていることが記されている。里山の利用は東神吉小学校に限られていた。ため池の利用については、2018 年 1 月 31 日に追加調査をおこなった加古川市立西神吉小学校の須藤教頭への聞き取りによると、同校では以前、創立百周年を記念した際のイベントとして西神吉ウォークが行われ、そのイベントの一環としてかいぼりが行われたとのことであった。しかし、現在そのような活動は授業の一環としては行われていない。

そこで、子どもの自然体験活動を行う機会が減少している現状を踏まえ、本研究では、加古川市西部地域を研究対象として作成したウォーキングマップの kids 班担当部分を使って、親が子どもを自然の中に連れ出すことにより、子どもが地元にある自然に関心を持ち、自然に触れあう子どもが増えていくようにするためには、どのような工夫をすればよいのか検討する。

今回、現地調査班が、研究対象とした加古川市西部地域において、里山（神吉山、黒岩山、宮山）、ため池、農地を現地踏査したうえで、各地区の町内会関係者や神吉町内会ふれあい里山会のメンバー、みやまえ営農組合担当者に対して聞き取り調査を行った。これらのフィールドワークの結果に基づいて kid 班として検討を行なう。なお、黒岩山の管理に関して、兵庫県東播磨県民局加古川農林水産振興事務所森林課の平野氏に対して、後日電話による聞き取り調査を kids 班として実施した。

本研究は以下の通りに進める。2 節では、子どもが自然体験活動を行うことの意義について述べる。3 節では、子どもにとってより良い kids マップを作成するにあたって、現地踏査や聞き取り調査といったフィールドワークで見えてきた課題や子どもが自然体験をするために注意すべきポイントや子どもに気づいてほしいポイント、地域の魅力を伝えるうえで留意した点について述べる。4 節では検討結果を振り返り、マップを活用するうえで、子どもが自然の中でのびのびと遊べるよう、地域住民や自治体、兵庫県への課題を提示した。

## 2. 子どもが自然体験活動を行うことの意義

kids 班では、子どもの外遊びや運動の減少による体力低下を改善するために、自然体験活動を行うことが重要な方法だと考える。ここでは、なぜ自然体験活動を行う必要があるのか、自然体験活動を行う意義について考えていく。

文部科学省ホームページ「(2)子どもを取り巻く環境の問題」によると、現代の日本において、科学技術の進展、経済の発展で、生活が便利になり、生活様式が変化するなど、子どもの生活全体が、歩いたり、外で遊んだりするなどの日常的な身体運動が減少する方向に変化した。具体的には、自動車の普及など交通手段の発達により、歩く機会が減少するとともに、生活道路での遊びなどが困難になり、手軽に体を動かす機会が減少しているとのことである。

このような子どもを取り巻く環境が変化する中で、朝日新聞 2016 年 10 月 8 日記事「(きょういく トーク 埼玉) けやの森学園代表・佐藤朝代さんに聞く/埼玉県」には、子どもに自然を体験させる取り組み、意義について、埼玉県狭山市で幼稚園と保育園を運営する「けやの森学園」を例に取り上げている。けやの森学園は、週 2 回広大な林の中で遊び、時には富士登山にも挑戦をするような幼児教育を約 40 年間続けている。幼児期に自然を体験させる意義について、「自分で生きていく力を養うため」と述べている。子どもたちはユニークで本質的な着眼点を持ち、自ら出した疑問を通して、遊びの中で学んでいく。自分たちで疑問を持ち、調べて、行動を起こすことで、自分で生きていく力を養っていく。

自然体験活動の一つに冒険遊び場づくりが挙げられる（田中 2017）。日本冒険遊び場づくり協会ホームページによると、冒険遊び場とは、子ども自身が「遊び」を作る遊び場だという。そこでは、火を使ったり、地面に穴を掘ったり、木に登ったり、何か物を作ったりする。遊び場にある道具を使って、自分の思うように遊んでいく。さまざまな遊びが展開され、変化し続ける遊び場となっている。子どもの生きる力を育むために、なるべく禁止事項を減らし、自由な空間の中で、自分自身で遊び場を作ることを目的とする。

以上のことから、子どもが疑問を持ったり、子ども自身が自ら遊ぶ空間を作り、遊んだりしていくことにより、結果的に体力の低下も補うことができると考える。Kids 班では、作成するマップが、この地域の里山、ため池、農地などの自然の中で遊ぶ子どもが増えるきっかけにならないかと考える。

### 3. Kids マップを作成するために

#### (1) 研究対象地域における留意点

加古川市西部地域において、子どもが身近で体験できる自然環境は、主に里山、ため池、農地である。子どもが、岩や土、水、植物、動物などを、五感で感じ、自然体験できる格好の場所だといえる。しかし、これらの自然環境を子どもが利用し、体験するためには、子どもだからこそ、気をつけねばならない点があると思われる。例えば、里山は安全に利用することができるのか。ため池にはどのような注意点があるのか。そして、農地には子どもにとってどのような学びがあるのか。また、これらにおいて子どもが自然体験をするためには、どういった注意点があるのか、といった点である。

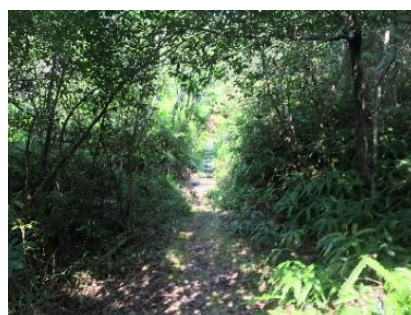


写真1 神吉山の登山道  
2017年8月21日 秋元撮影

なお、今回の研究対象地域のうち、農業用水路は遊びに適していないといえる。3面がコンクリートで固められているため、生き物はほとんど生息していないからである。また、水路沿いは急傾斜で深く、子どもの立ち入りは危険である。

#### ①神吉山

神吉山は、東神吉町神吉地区の北部に位置する、北山、中山、行者山、小山（前山）の総称で、標高60～80m台の連山である。

神吉町内会ふれあい里山会神吉の山脇氏によると、神吉山では、ふれあい里山会のメンバーが、森林整備や散策路整備などの里山整備活動を、毎月1回3時間程度実施しているため、写真1のように比較的安全で登りやすい登山道になっている。



現地踏査から、岩盤が露出していて滑りやすくなっているところがあるものの、手すりや整備された階段が設置されていた。また、道が草や木々に覆われている箇所はなかった。実際に登山道を歩いてみても、順路がわかりにくい場所、通り抜けが難しい場所は確認できなかった。

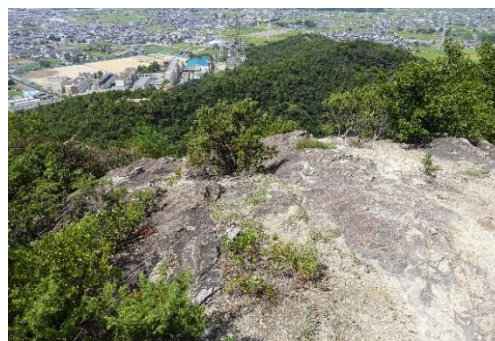


写真 2 黒岩山山頂南西側の露出した岩盤 2017年9月9日 矢嶋撮影

以上から、神吉山に関しては、ふれあい里山会のメンバーの活動により、子どもが安全にハイキングをできる環境が整っているといえるだろう。

## ②黒岩山

黒岩山は東神吉町天下原地区の北部に位置する標高 132.5m の山で、神吉山の小山（前山）に連なる。

現地踏査から、子どもが黒岩山をハイキングコースとして利用するには、保護者の同伴が必要と考える。写真 2 の神吉山と黒岩山山頂の間では、急傾斜の岩盤が露出しているところが登山道になっている。手すりや階段がないため、部分的に中級者向けの登山道であるといえる。また、平荘湖と黒岩山の間登山道は、2017 年 9 月の現地踏査時点では草刈りがされておらず、草や木々に覆われていた。道標となる矢印もいくつか設置されていたが、ペンキが剥がれて薄くなっていたため、道が分かりにくい場所があった。

こうした点が整備されれば、多くの大人が黒岩山を安全に利用することができるだろう。また、少なくとも平荘湖と黒岩山間であれば、子どもも利用可能な自然体験の場となるかもしれない。

なお、2017 年 12 月 25 日に電話による聞き取り調査を行なった兵庫県東播磨県民局加古川農林水産振興事務所森林課の平野氏によると、黒岩山は関西電力が草刈りなどの整備を行っているとのことである。黒岩山の頂上へ送電線の鉄塔が設置されているため、関西電力が登山道を管理しているとのことであり、現実的にはいろいろな調整が必要になると考えられる。

## ③宮山

宮山は西神吉町宮前の北部に位置する標高 87.7m の山である。

宮前町内会長の原氏によると、宮山は町内会が管理しており、ハイキングコースの看板は加古川市、標識は町内会が管理している。宮山では、年 1 回草刈りが行われ、宮山近隣の世帯から 2 人ずつが参加し、計十数人で行われている。

登山道については、年 1 回の草刈りということもあり、現地踏査の時点では、主に頂上部分で草や木々が道を覆っていた。宮山全体を見ると、子どもにとっておおむね危険はないと感じられた。なお、北尾根付近には踏み跡があるものの、公式のルートからは外れているの

で注意したい。また、現地調査の時点で、神吉八幡神社横の登山口から歩いて10分程度のところで発生している小規模な崩落地付近で、頂上へ向かうルートへの分岐点が分かりにくくなっていた。神吉八幡神社からの登山口のところにはコースマップの看板が設置されていたが、倒れたままになっていた。

以上のことから、子どもが安全に宮山のハイキングコースを利用できるようにするためには、可能な限りで宮山の登山道の整備活動を充実させることが望ましい。

#### ④ため池

加古川市西部地域には多数のため池が見られ、農業用水源として用いられている。

ため池の草刈りについては、西神吉町鼎富木の富木町内会長である久保氏に同地区の蓮池と盆の池について、志方町投松の早瀬氏に同地区の畑谷池について聞くことができた。

富木町内会長の久保氏によると、ため池の草刈りは地区の営農組合員が行っており、自家用草刈り機と大型草刈り機を使用して、草が伸び始めた時に行っているとのことである。例年では、年2、3回程行われている。営農組合に補助金が出ており、草刈り機の使用料と燃料費は補助金から賄っているとのことである。そのため、今のところ個人の負担はない。

また、畑谷池周辺の遊歩道は、十分に草刈りがされていたが、堤の端で草木におおわれている部分が見受けられた。早瀬氏によれば、畑谷池周辺の農地の農作物が、イノシシによる被害を受けているという。

2017年6月11日の現地踏査時点では、蓮池の堤の上は雑草におおわれており、歩くには、少々かき分けて進む必要があった。盆の池沿いの道に関しては、農道になっており、草は生えにくくなっているため、比較的通りやすい道であった。子どもが安全に、ため池の自然に触れ合えるようにするためにも、これらため池での堤の一部の草刈りを頻繁に行うことが望ましいものの、予算や人員の事情も考慮する必要がある。

次に、ため池のかいぼりについて触れる。兵庫県いなみ野ため池ミュージアムホームページ「4、魅力づくり」によると、かいぼりとは、ため池用水が不必要となった冬季にため池の水を落水させることである。富木町内会長の久保氏によると、子どものかいぼりへの参加が少ないことが分かった。例年、親子でかいぼりに参加しているのは、1、2組とのことである。そこで、さらに親子でかいぼりに参加してもらうための取り組みとして、町内会でのロコミによる広報活動を行っているとのことである。なお、2017年8月15日から、加古川市のFacebookで広報ができるようになったとのことである。



写真3 子どものかいぼりの様子  
2017年11月4日 矢嶋撮影

また、兵庫県ホームページに掲載される、ひょうごため池新聞第23号(2017年10月)に、盆の池かいぼり&地域交流会という見出しの記事があり、業飯実施が案内されていた。

2017年11月に盆の池で行われたかいぼりに参加した矢嶋ゼミ2回生によれば、子どもが6～7人も参加していたとのことであり(写真3)、子どもも池に入ってかいぼりを楽しんでいた。

今回、広報が具体的にどう影響をお呼びしたのかはわからないが、引き続き子どもにかいぼりに参加してもらうためにも、広報活動の場を広げ、かいぼりの発信を続けていく必要がある。

#### ⑤農地

加古川市西部地域では、季節ごとに様々な作物が育てられている。

富木町内会長の久保氏によると、地区内で作られている作物は季節ごとに変わり、2017年9月9日の調査時点では秋に向けてアキナスビを育てているとのことである。育てた米は、ほとんどの人が自ら消費しているが、一部には出荷している農家もある。

宮前町内会長の原氏によると、宮前における農作物は、米や大麦、酒米、さつまいも、じゃがいも、トウモロコシ、キャベツ、タマネギ、イチゴ、コスモス、ヘアリーベッチ(緑肥用)などがあるとのことである。酒米はみやまえ営農組合が試作している。同組合の佐伯氏によると、家族で参加できるイベントが同地区で行われていて、主催は加古川市で、6月に行われる夢錦田植え体験や9月に行われる夢錦稲刈り体験である。参加費は300円で、体験後の卵かけごはんが子どもに人気とのことである。

そして、コスモス祭りと呼ばれる、農地を生かしたイベントも行われている。天下原町内会長の田中氏によると、コスモス祭りは元々ウエルネスパークのイベントから始まったとのことである。家族と一緒にイベントを体験してもらい、コスモスが道の両脇に植えられている様子を見て楽しんでもらうことが目的である。天下原町内会ではサツマイモを1800個程栽培していて、コスモス祭りの中では、そのうちの800個程を使い、実際に参加者に芋掘り体験をしてもらうというイベントも行われている。その参加費の200円を収益に当てているとのことである。また、天下原を周るクイズラリーも行われていて、景品としてお菓子が配られている。

このように様々な農作物や農地を活かしたイベントが行われているが、通常時の農地における子どもの行動として注意すべきことがある。田畑は人の私有地であるが、子どもが無断で侵入してしまう恐れがある。そのため、子どもが入らないように親が責任をもって教える必要がある。以上のことに留意しつつ、イベントに参加することにより、子どもが農地への理解をより一層深めることにつながるだろう。

#### ⑥公共施設

東神吉町天下原に位置する加古川ウエルネスパーク担当者によれば、この施設には公園や広場、プール、池、また、音楽ホールや図書館、レストラン、セミナールームクッキングスタジオなどの施設がある。それぞれの施設で毎年多くのイベントが開催されている。屋外イベントには家族で参加できるコスモス祭りがある他、4月と11月には加古川市役所健康課と合同でハイキングイベントも行われている。なお、図書館には、子どもコーナーも設置

されている。さらに、自転車の貸し出しも行われているため、自転車による周辺地区の散策もできる。

次に、西神吉町鼎富木に位置する加古川市立総合体育館の担当者によれば、この施設では、様々なスポーツの大会が行われている。プロの試合は観戦料金を要するが、アマチュアの試合は無料で観戦できる。そして、総合体育館の外にはアスレチックやボルタリングが設置されており、これも無料で使用できる。実際のスポーツを目の当たりにすることができ、子どもでも挑戦できるようになっている。

#### ⑦歴史

東神吉町天下原町内会長の田中氏によると、大歳神社（天下原の毘沙門さん）には、岩に彫られた毘沙門天の磨崖仏が本尊としてまつられている。守り神はムカデであるとのことである。加古川 60 選にも選ばれている。春には花見ができ、秋には紅葉がみられる。

宮前町内会長の原氏によると、神吉八幡神社は 1638 年に現在の場所に建てられたとされている。もともと下宮に位置していたが、格式を上げるため宮山に持ってきたとされている。2015 年度矢嶋ゼミ夏合宿報告書によると、秋には 1950、60 年頃に復活した祭りが毎年第 1 土曜日曜に行われている。

宮山は、山自体が古墳となっていて、神吉山にも古墳が多くみられる。また、西神吉町や東神吉町の各地区には、古墳の石棺から作られた石仏が多数みられる。

#### (2) 気づきのポイント

西神吉町の富木地区、宮前地区、東神吉町の神吉地区、天下原地区には里山、ため池、農地といった自然と触れ合う場が豊富にあり、歴史の学びの場もある。以下においては、子どもの気づきの機会を増やすために、どのような点に注意してマップを作成したかを述べていく。

#### ①子どもの視点になってみる

子どもの視点になって里山、ため池、農地、地区内を歩くことにより、子どもの関心に合ったマップ作りが可能となる。子どもの関心を一層促すには、遊び感覚での自然体験学習が良いと考える。身近な自然を理解し、なにが危険な行為なのかを理解することで、結果的に自然を体験する方法を学ぶことができることが期待される。また、それにより子どもの里山、ため池、農地への興味関心が高まるのではないだろうか。

#### ②保護者の注意力

子どもが安心安全に里山、ため池、農地を体験し、歴史を学ぶためには、保護者の注意力が必要不可欠である。子供の安全という点から検討した。

ため池周辺での主な注意すべき点は水難事故の危険性である。本来農業者の施設であることは当然のことであり、許可なく立ち入ってはならない。加えて、ため池の特性に関して、ため池の底は主に泥であり足が抜けにくい。そのため、不用意にため池に入るのは危険であることを知っておく必要がある。したがって、通常時はため池の景観を楽しんだりする利用方法が望ましい。ただし、富木地区のように、11～12 月にかけてかいぼりを行っている地

区があるため、このイベントを利用すれば子どもが池の中に入ることができ、池の生物にふれることもできる。

里山では、一部に岩盤が露出していて滑りやすくなっている登山道や、草刈りが及んでいない場所があり、注意が必要である。なお、夏はスズメバチの活動が活発になるため、注意が必要である。

また、一般道路においても歩道の幅に注意する必要がある。畑谷池と神吉山を結ぶ地方道は二車線道路で、交通量は都心ほど多くはないが、歩道がない区間もあることから、注意が必要である。

### ③子どもの学びポイント

子どもが里山に入るには保護者同伴が望ましい。安全面の配慮もあるが、保護者が子どもの疑問に答えることも必要と考えるからである。

里山を子どもと楽しむためには、よく知られた昆虫、樹木を知っておくと良い。宮山踏査中には、ナナフシ、カブトムシ、クワガタといった昆虫、ヒノキ、クリノキ、マツといった樹木を目にした。神吉町内会作成の神吉山の資料によると、神吉山には、メジロ、ウグイス、エナガ、キジバト、シジュウガラアオサギ、ハイタカ、ヒヨドリ、カケス、ホウジロ、コゲラ、モズ、ルリビタキ、ヤマガラ、カワラヒラ、キジ、キクイタダキといった鳥類が生息しているとのことである。樹木では、シバグリ、シャシャンボ、ネズミモチ、タラヨウ、ヒイラギ、イヌビワ、ミツバツツジ、サルトリイバラ、カマズミ、イソノキ、アカメガシワ、アカマツ、ヤマザクラ、ガマズミ、アラカシ、ソヨゴ、クヌギ、クロガネモチ、タケがみられる。

なお、ウルシもみられるとのことであり、アレルギー性接触性皮膚炎をおこしやすいので注意が必要である。また、マムシ、アライグマ、イタチ、スズメバチといった危険な生物がいることも認識させたい。

ウォーキングマップにおいてkids 班担当部分が使用できるスペースに限界があるために、動物や植物の生息については、自然・農業景観班のマップを見るように促している。ただし、詳しくは記載されていないため、是非図鑑の活用をしてほしい。図鑑は加古川ウエルネスパーク図書館で借りることができる。

農地では、輪作や二毛作、ヘアリーベッチ農法による稲の栽培が行われている。年や季節によって植える農作物が異なるため、農地の景観は変化する。

畑で栽培されているキャベツ、ジャガイモ、タマネギは連作障害が起きるため、輪作を行ったり、コスモスを植えたりして障害を回避している。二毛作とは夏季に稲作、秋季から春季にかけて麦作を栽培することである。ヘアリーベッチ農法とは、ヘアリーベッチを緑肥として土にすりこむことで、雑草の発生が抑制され、無化学肥料、減農薬で稲を栽培することができる農法である。タキイ種苗(株) ホームページのタキイの「緑肥・景観作物」「ヘアリーベッチ」によると、ヘアリーベッチの開花時期は4~5月とされる。農地の景観を楽しむ中で、なぜ農地の景観が移り変わるのかといった疑問も一つの学びのポイントとなる。

この地域の歴史は、小学生の児童にとっては少々難しいかもしれない。だが、中学校に進学して社会科で歴史を学んだときに、教科書に記述されている歴史と身近にある歴史が重なったり、歴史に興味を持つための入り口になればよいと考える。

以上の点について、マップの利用者が留意して子どもの自然体験活動が行われれば、充実したものになるのではないかと考える。

### (3) マップ作成について

これまでに述べた研究対象地域における留意点、気づきのポイントを踏まえて、kids 班は担当部分のマップを作成した。「もぐもぐくてく編」が kids 班担当部分である。

kids 班は、情報を保護者だけでなく、多くの子どもに直接伝えるべく子どもでも親しみやすいようにマップにまとめた。なお、kids 班では当初、子どもが理解できる内容で1枚のマップを作成することを方針とし、子どもにとって分かりやすい会話調の文体で作成をしていた。しかし、経費の関係上、kids 班のみのページを作ることは難しかった。そこで、保護者と子どもと一緒に行動することを念頭に置き、飲食店や販売店舗などウォーキングのインフラも同時に掲載することにした。そして、それに伴い、当初は子ども向けにしていた文末表現を、一般向けに改めた。

実際に加古川西部地域の自然と触れ合うことが出来る里山、ため池、農地に関する留意点は、大人の視点ではなく、子どもの視点に変えてフィールドワークを行わなければ気がつかないことがある。黒岩山では、岩盤が露出していて、子どもには危険を伴うと考えられることからマップからは外した。一方で、宮山は町内会が年1回草刈りを行っており、登山道の安全性が比較的確保されていることから取り上げた。

ため池については、堤の上の草刈りが行われていることや堤が道路となっている場合があることから取り上げた。農地については、年や季節による景観の移り変わりに、子どもが関心を持つよう配慮した。

歴史に関しては、神吉八幡神社は祭りが行われていることもあり、子どもに親しみやすい場所となっているため掲載した。天下原の毘沙門さん（大歳神社）は、磨崖仏がある珍しさの点や桜や紅葉を楽しむ場所である点から、取り上げた。

町内会や公共施設、営農組合が、地区外の人でも参加できるイベントを開催しているため、家族での参加者が増えるように記した。

以上のように、子どもを対象に含まなければ気が付かない、地元の自然を活かした自然体験活動としてのウォーキングの魅力や課題が明らかになった。当たり前のことではあるが、踏査しなければわからないことばかりであった。この地域においても、子どもにとって様々な自然と歴史の学びの場があることがわかったが、全く安全というわけではない。自然と触れ合うためには保護者、そして子ども自らの注意が必要不可欠である。

#### 4. おわりに

本研究は、加古川市西部地域を研究対象として作成したウォーキングマップのkids 班担当部分を使って、親が子どもを自然の中に連れ出すことにより、子どもが地元にあるに関心を持ち、自然に触れあう子どもを増えていくようにするためには、どのような工夫をすればよいのか検討した。それにあたって、現地踏査と聞き取り調査によるフィールドワーク結果に基づき、地域住民、また地区外の人に加古川西部地域の魅力を再認識してもらい、興味を持って、子どもを自然の中へと連れ出してもらえるようにマップを作成した。

2節では、子どもが自然体験活動を行うことの意義について考えた2つの事例から、自然体験活動を行うことにより、子どもが自然の中で生きる力を自発的に学び、養っていくことで、体力の低下が補われ、子どもの主体性や自立性が育てられると考えた。3節では、子どもにとってより良いkids マップを作成するために、現地踏査や聞き取り調査といったフィールドワークの結果から、この地域の里山、ため池、農地、学ぶことができる歴史、利用できる施設について、子どもに気付いてほしいポイントや保護者が注意すべき点、地域の魅力を子どもに伝えるために留意した点について述べた。

以上から、子どもに地域の自然と歴史に関心を持ってもらうことにより、親たちもそれらが価値のあるより良いものと気付くようになってもらうことが必要である。また、こうした地域が有する価値を保っていくためには、地域の環境が荒廃していくことを防ぎ、農地が放置されることを食い止め、地域の歴史的な財産を将来に渡って残していくような住民の意識づくりが大切である。そのためには、ベテラン層のみならず、親たちが地域の魅力に気付く、当事者意識をもって、環境保全活動を率先して担っていくようになっていくことが大切ではないだろうか。

地域住民がより積極的に活動していくためには、十分なサポートが必要である。具体的には、自治体や兵庫県が地域住民の地域作りにつながるさまざまな活動に対して、今まで以上に手厚いサポートを行なうとともに、活動が持続していくような仕組みをつくる必要がある。また、積極的な広報活動として、加古川市のFacebook や、兵庫県庁ホームページを活用し、イベント情報を引き続き発信していく必要がある。これらの広報活動によって、自治体や県に取り組みが認識されることで、地域住民の気持ちが勇気づけられるのではないかと。加えて、町内会の回覧板による地区住民に向けたイベント情報の広報を地道に続けていくことも必要である。こうした広報活動がきっかけとなって、さまざまな活動が地域住民の目に触れられるようになり賛同者が増えていけば、環境保全活動やイベントに携わる仲間となっていくことが期待される。

以上から、子どもが自然体験活動をする機会を増やしていくためには、地域住民や町内会の人々の協力のもと、親世代のやる気がさらに出るような環境整備やイベント広報が必要と考えた。

最後に、子ども向けマップを作成する過程で、大人とは異なる感性を持った子どもならではの感じ方や子どもの視点からみえる景色など、子ども向けのマップを作る難しさを感じられた。

一方で、私たちの狙いはマップを通して子どもの自然への興味を引き出し、子どもが自然に触れ合う機会を作ることである。自然に触れ合い、生きる力を存分に養い、kids 班の作ったマップを多くの子どもの手に取ってもらい、実際に歩いて、是非地域の自然に触れ、歴史についても学んでもらいたい。

### <参考文献・ホームページ>

- 田中直人 (2017)「二次的自然を活かす人々の取り組み—淡路島の里地里山について—」人間文化 (神戸学院大学人文学会) 41、pp. 73-83
- 矢嶋 巖・神戸学院大学人文学部人文学科人間と社会コース現代社会領域 2015 年度現代社会専攻演習Ⅲ (矢嶋ゼミ) 履修生 (2016)「都市近郊農村のより良い生活環境を目指して—加古川西部地域における宝物の発見—」神戸学院大学地域研究センター編『都市郊外地域における大学と地域との協働に関する研究 研究成果報告書<地域研究センター都市郊外班>』神戸学院大学地域研究センター、pp. 1-56
- 朝日新聞 2016 年 10 月 8 日記事「(きょういくトーク埼玉) けやの森学園代表・佐藤朝代さんに聞く/埼玉県」<http://database.asahi.com/library2/main/top.php> (2017 年 12 月 20 日閲覧)
- 加古川市ホームページ「加古川市の学校・幼稚園」  
<http://www.city.kakogawa.lg.jp/gakoen/index.html> (2017 年 12 月 25 日閲覧)
- タキイ株式会社ホームページ「タキイの緑肥・景観植物 ヘアリーベッチ」(2018 年 2 月 4 日閲覧) <http://www.takii.co.jp/green/ryokuhi/betchi/index.html>
- 日本冒険遊び場づくり協会ホームページ (2018 年 1 月 29 日閲覧)  
<http://bouken-asobiba.org/make/children.html>
- 日本学術会議提言「学校教育を中心とした環境教育の充実に向けて」(2018 年 1 月 28 日閲覧) [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsoee/18/2/18\\_2\\_2\\_60/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsoee/18/2/18_2_2_60/_pdf)
- 兵庫県いなみ野ため池ミュージアムホームページ「4. 魅力づくり」(2017 年 12 月 25 日閲覧) [http://www.inamino-tameike-museum.com/pdf/08\\_11/005\\_4.pdf](http://www.inamino-tameike-museum.com/pdf/08_11/005_4.pdf)
- ひょうごため池新聞第 23 号「盆の池かいぼり&地域交流会」(2017 年 12 月 25 日閲覧)  
[https://web.pref.hyogo.lg.jp/nk11/documents/tameikeshinbun201710\\_1.pdf](https://web.pref.hyogo.lg.jp/nk11/documents/tameikeshinbun201710_1.pdf)
- 文部科学省ホームページ「3 子どもの体力の低下の原因(2)子どもの取り巻く環境の問題」(2018 年 1 月 28 日閲覧)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344534.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344534.htm)



## 第2部 大都市都心における地域変遷把握のためのフィールドワーク —神戸駅・新開地・元町通商店街付近—

神戸学院大学人文学部人文学科地域社会領域

矢嶋 巖

神戸学院大学人文学部人文学科地域社会領域

2017年度地域社会専攻演習Ⅱ（矢嶋ゼミ）履修生

神戸学院大学人文学部人文学科 2016年度地域社会専攻演習Ⅰ（2回生後期矢嶋ゼミ）では、2017年3月26日に、大都市都心である神戸市の神戸駅付近、新開地、元町通商店街4・5・6丁目付近において、地域の景観を読み解くフィールドワークを行なった。大都市の都心（神戸）、衛星都市となった城下町・宿場町（明石市大蔵地区）、今なお都市化が進む郊外地域（有瀬キャンパス周辺）、都市近郊農村（加古川市西部地域）をステージとする矢嶋ゼミのフィールドワークの中では、最も都市化が進んだ地域である。

その意図するところは、①旧湊川跡を開発して形成された新開地において、近代に展開した神戸の都市化の痕跡を現在の地形や都市景観から読み取ること、②商業集積としては衰退の傾向にあるといえる元町通商店街の西半部において1980年代半ばの住宅地図を資料として店舗の変化を分析することにより、矢嶋担当講義「地域社会概論」で講じている日本の小売業の変容を目の当たりにすることである。また、後述の通り、③学生自らが依頼して商店主に対して聞き取り調査を行なうことで、実地の経験を得ることも一歩踏み出すことを体験し、現場対応力を鍛える機会とすることも挙げられる。

フィールドワークでは、ゼミ生17名を5班に分け、新開地ではCinema Kobeから神戸アートビレッジセンター付近にかけての区域を、班ごとに観察、記録させた。なかには、映画館の関係者に聞き取り調査をおこなった班もある。また、元町通商店街では、元町通6丁目西半部、同東半部、5丁目西半部、同東半部、4丁目西半部の区域の調査を、各班が担当することとした。その際、用意した2500分の1地形図に、現状の店舗の名称と取扱商品・サービスを記録すること、聞き取り調査を依頼できそうな店舗を学生自らが考えてみつけて依頼し実施することを課した。なお、出発時から各班にコンパクトカメラを割り当て、適宜撮影させている。

調査のまとめ作業は、4月からの2017年度地域社会専攻演習Ⅱ（3回生前期矢嶋ゼミ）において行なった。ここでは、入手できていた元町通の1985年、1987年、1998年、2006年の住宅地図の複写を各班に貸し出し、担当した区域において店舗がいかに変化したのかをわかりやすく表現することを重要なポイントとした。その際、根田（2016）や、関西大学文学部地理学・地域環境学教室編（2015）に含まれる商業集積の分析結果を参考にしつつ、各班においてわかりやすさをそれぞれ考えて表現することを条件とした。そのため、元町通商

店街の商業集積の分析結果の表現方法はまちまちで、出来映えもさまざまとなってしまった。研究結果はパワーポイントのスライドにまとめ、ゼミ発表を行なった。当初は5月初旬には終えるつもりであったが、作業が長引いたため、作業完了は5月下旬となってしまった。

本研究は、3年次前期の習作段階であり、文章力が乏しいものや表現が不十分なものが目立つ。しかし、一部の聞き取り調査結果や住宅地図と現地調査による商業集積の分析結果には残しておくべき内容も含まれているため、第5 Semester（3回生前期）におけるゼミ研究結果の記録として、本報告書に掲載することとした。掲載することを決めた段階で、指導教員である矢嶋が確認し、かなりの箇所を訂正を行なったが、十分ではない可能性もある。ご留意頂いてご覧頂きたい。

なお、パワーポイントはカラーで作成されたが、本報告には白黒で掲載する。とはいえ、神戸元町通商店街における店舗の変遷については、業種を着色で示すように指示していたため、各班の当該スライドだけを集め、第2部の最後にカラーページとして再掲載した。

このフィールドワークの実施にあたっては、新開地の Cinema KOBE の皆様、こうべまちづくり会館の皆様、神戸元町通商店街の皆様から、多大なるご協力を得た。記して心より感謝の意を表したい。また、学生たちには、是非都心の面白さに魅力を感じ、友人や家族を誘って街歩きを楽しむようになってもらいたいし、この経験をいつか仕事の現場で活かして欲しい。

(矢嶋 巖)

#### <参考文献>

関西大学文学部地理学・地域環境学教室編集発行（2015）『鳥取市の地理 地理学実習報告書 2014 年度』

根田克彦（2016）『まちづくりのための中心市街地活性化—イギリスと日本の実証研究—』古今書院